

植物に由来する地名

(1) 足柄と葦刈

平田 信芳

足柄山の山奥で、けだもの集めて

角力のけいこ、ハッケヨイヤノコッタ

ハッケヨイヤノコッタ

マサカリかついだ金太郎

熊にまたがり、お馬のけいこ

ハイシドウドウハイドウドウ

ハイシドウドウハイドウドウ

幼い日の記憶は根強く、坂田金時は足柄山で育ったと信じていた。『神奈川県地名大辞典』を見ると、「古くから足柄山のよび名はあるが特定の山をさすものでなく、足柄峠一帯の山のことを云い、最高峰を金時山という」とあった。あつげにとられた。

『万葉集』にある「足柄」の用例を数えると、足柄が2例、安思我良（アシガラ）が9例、阿之我利（アシガリ）が5例である。アシガラ、アシガリの違いは気になるのだろう、万葉集の研究者たちは、アシガリはアシガラの訛音であるとか、アシガリが正しい固有の地名であるとか、いろいろな解釈をしている。

日頃、『鹿児島県地名大辞典』の小字一覧から地名を

カードに書き抜く作業をしているが、「芦刈」という地名が意外と多いのに気付いた。

葦刈……菱刈町市山

芦刈……鹿児島市下伊敷・始良町平松・喜入町中名・

川辺町本別府・中種子町野間・上甕村小島・

宮之城町広瀬

芦狩……吹上町与倉・松本町入佐

アシカリ……加世田市津貫

アシカイ……頼娃町上別府

足加イ……頼娃町牧之内

鹿児島県だけで「アシカリ」地名が十数例あるのを見ると、「阿之我利」は「葦刈・芦刈」であるとの確信を持つようになった。葦の密生している葦河原（足柄）で葦刈の作業をする時、景観および土地そのものに重点を置く立場の人々は葦河原ととらえるだろうが、労働をする側から見るとつらい葦刈の場であることになる。小字名に葦刈・芦刈が多く見られるのは、庶民の立場からの命名と見てよいだろう。

豊葦原の千五百秋の瑞穂国と云われた古代の日本では、葦は燃料や垣根の材料として役立っていた。万葉集に「葦火（あしび）たく」とあったり、「葦垣（あしがき）」の語を見受ける。また葦守（あしもり）という職掌もあった。これらを思う時、「豊葦原」の意味が実感として味わえる。

〈日本考古学会員・鹿児島地名研究会世話役〉

植物に由来する地名

(2) 市 後 柄

平 田 信 芳

霧島山。これは霧島山地全体の呼び名で、特定の峰を指すものではない。前回取りあげた足柄山と同様な呼び名とみられる。霧島山の西麓に「市後柄」という地名がある。海拔五百メートルの人里離れた所である。五万分の一図「霧島山」の左下の部分で見出せる。『日本地名索引』は「いちごえ」と読んでいるが、「いちごがら」が正しい。

市後柄。「市後」は苺(いちご)に由来する地名に違いない。巫女のことを「いちこ」と言うが、これに結びつく地名はまずないだろう。「柄」は河原(かわら)のあて字であり、河原は鹿児島弁では「かあら」に聞こえることが多い。市後柄は苺河原(いちごがわら)のあて字であるとみなすと、これは植生地名として、また地名の命名法として、ごく自然に理解することが出来る。『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小字一覧に類例を求めてみた。

市後柄……霧島町田口・牧園町持松

イチゴガラ……鹿児島市川上・輝北町市成

一合柄……吉田町宮之浦

苺河原は以上だが、イチゴ山(東市来町湯田)・一胡山(加治木町日木山)、苺平(吹上町和田)・市後平(指宿市岩元・指宿市新西方)、イチゴ迫(財部町南俣)・市後迫(指宿市新西方・溝辺町崎森・大隅町月野・大隅町坂元)・市五ヶ迫(末吉町二之方)など、イチゴの植生地名とみなされるものは多い。『日本地名索引』から類例を探すと、市子(いちご。愛知県)・市午(いちご。兵庫県)・覆盆子鶴(いちごずる。宮崎県)などがある。覆盆子は苺の異名であり、和名抄巻十七に和名は「以知古」とある。

地名に付けられた「イチゴ」は、山野に自生しているいわゆる木苺のことである。栽培され市販されている西洋苺のことではない。ストローベリーすなわち西洋苺は、江戸時代にオランダ人の手によってもたらされた。これが地名的なものになって登場するのは、イチゴ畑・イチゴ園・イチゴ狩の類である。和名抄に「覆盆子」の記載があることから考えると、好んで食べられた野生の木苺に基づく地名の発生は、平安時代以前と考えてよい。

「市後柄」という地名の分析で、「柄」が河原のあて字であることが判った。さらに、「足柄」を葦河原と解くことが出来たのである。一地方の地名が全国レベルの地名研究に結びつく好例でもある。

(鹿児島県地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(3) 梅 木

平田 信 芳

三十数年前のことである。市来農芸高校に転任して「梅木(うめき)」という苗字の生徒に出会った。「梅之木」ならば優雅な苗字と感じたのだろうが、即物的な「梅木」にはカルチュア・ショックを受け、思わずうめき声を発した。梅木君はきよとんとんとしていた。

梅が枝に来るうぐひす春かけて

鳴けどもいまだ雪は降りつつ

(古今集、よみ人しらず)

東風吹かばにはひおこせよ梅の花

あるじなしとて春を忘るな

(拾遺集、菅原道真)

それまでに詰め込まれた知識は、右のような歌を味わう貴族的知性と教養だったことを知った。直接的であつてからかんとした庶民的表現は素朴であり、たくましい。

苗字は九割方、地名に由来する。その意味で『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小字一覧にある「梅・梅木」地名を当たってみた。「梅木」は大口(3)・鹿屋・串木野・国分(2)・川内(3)・垂水・霧島・吉田・大浦・宮之城・末

吉・市来などに18例ある。このうち大口(3)・垂水・吉田・市来の場合には「うめき」とルビが振ってある。霧島町の場合には「うめのき」となっている。残りはルビがない。「梅ノ木」という地名は鹿児島・大口・川内・牧園・大根占にみられる。この他に梅木迫(12)・梅木ケ迫(8)・梅木山(5)・梅木田(4)・梅木ケ谷(3)・梅木ケ丸(3)・梅木ケ原(2)・梅木平(2)・梅木渡瀬(2)・梅木原・梅木林・梅木ケ段・梅木蘭などの「梅木」地名がある。「梅」だけが付くものに梅ケ谷(12)・梅山(9)・梅ケ迫(7)・梅ケ丸(6)・梅ケ橋(2)・梅ケ渡(2)・梅越(2)・梅本・梅ケ平・梅屋敷・梅木場・梅北・梅ケ町・梅里・梅田・梅ケ段などがある。以上をまとめると梅木・梅ノ木78例、梅ケ迫・梅木迫27例、梅ケ谷・梅木谷15例、梅山・梅木山14例が類例の多い地名となる。また「梅」地名の地域的特色を探ると、種子島に「梅屋敷」という地名が1例あるだけで、屋久島以南には皆無である。甌島にも「梅」地名が見られない。これは一つの特色ともなる。

次に、人文社『分県地図』の地名総覧から拾い出した「梅」地名ランク付けは、梅木・梅之木23例、梅田21例(埋田2例)、梅ケ丘12例、梅蘭11例、梅原9例、梅ケ枝7例、梅本7例、梅林6例、梅ケ谷6例、梅沢5例、梅野5例となる。4例以下は省略する。全国的な視点に立つても、「梅」地名の中では「梅木」という地名が最も多い。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(4) 榎 木

平田 信 芳

夕方七時のニュースと大河ドラマ以外はほとんどテレビを見ない。時偶見ると新たな顔触れで妙に感心させられる。芸能界の有為転変も目まぐるしい。そのたびに妻にタレントの名前を聞く。

「榎木孝明。この人はたしか鹿児島県出身。上杉謙信役。『うーん。ヨカニセだね。上杉謙信とは大役だな。』

何でも上杉謙信役に決まっていた俳優が病気で倒れたために急拠代役が募られ、オーディションに三人が応募したらしい。三人の中で馬に乗れたのは榎木だけだったという。馬にうまく乗れるか否かが代役選びのポイントになったらしい。

その昔、人々が馬に揺られて旅をした頃、街道には一里ごとに行程の目途となる一里塚があった。江戸時代の初め、幕府の命令で一里塚に「榎」が植えられたという。榎木と馬とはそんなことから「うま」が合っていたのだろうか。

ところで、苗字のほとんどは地名にもとづく。両者は密接不可分の関係であり、地名の考察は苗字の由来とも

結び付く。『鹿児島県地名大辞典』（角川）に見える「榎」地名では、榎田⁽²⁰⁾・榎木田⁽¹³⁾・榎木迫⁽¹⁵⁾・榎ヶ迫⁽⁷⁾・榎迫⁽⁵⁾・榎木元⁽⁴⁾・榎ノ本⁽²⁾・榎元⁽²⁾・榎原⁽⁴⁾・榎木原⁽³⁾・榎木丸⁽³⁾・榎木ヶ丸⁽²⁾・榎ヶ丸⁽¹⁾・榎丸⁽¹⁾・榎ヶ平⁽²⁾・榎平⁽²⁾・榎木平⁽¹⁾、榎段⁽²⁾・榎木段⁽²⁾・榎ヶ段⁽¹⁾などが類例の多い方である。榎木と榎の「木」の字の有無・助詞「ヶ」の有無などは、区別のために意図的に付けられたものだろう。他県では「榎」一字の地名が多い。二字の「榎木」は鹿児島表現でもある。榎木（えのき）という地名は薩摩町長野・大隅町中之内・市来町大里にある。

昭和48年の『鹿児島県電話帳』によると、「榎」姓は鹿児島市⁽³⁾・牧園町⁽²⁾・名瀬市・蒲生町・高尾野町・笠沙町・上甕村に各1例見られる。「榎木」姓は鹿児島市⁽¹¹⁾・川辺町⁽⁶⁾・出水市⁽⁵⁾・串木野市⁽³⁾・霧島町⁽³⁾・東市来町⁽³⁾・市来町⁽²⁾・鹿屋市⁽²⁾・川内市⁽²⁾・阿久根市⁽²⁾・枕崎市・垂水市・溝辺町・吉松町・菱刈町・佐多町に各1例見られる。上杉謙信はこの中の菱刈町の産である。

『日本国語大辞典』によると、「えのき」の語源は①エは枝で、枝の多い木の意、②柄の木の意、③モエノキ（燃木）の略、④エリノキ（選木）の意、⑤コエ（肥）ノ木の意、⑥エ（槐）ノ木に由来する、などの説がある。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(5) 樗 木

平 田 信 芳

中学二・三年の頃、日本文学全集を読みまくった。乱読であったが明治の文豪たちのペンネームに妙に感心していた。紅葉・漱石・柳浪・花袋・蘆花・鏡花・露伴・荷風などは名前も楽しむことが出来た。ただ樗牛（ちよぎゅう）という号には首をひねった。役にたため木で作った牛とは、のろくてにぶい驚馬（どば）よりも劣るのかなど考えたりした。教師になって「樗木」という苗字の生徒に出会うが、一人は「おうてき」と読み、一人は「おてき」と云う。国語辞典にも出て来ないので追求もしなかった。

このシリーズに当面して調べる気になった。「樗」は漢和辞典に「あふち・せんだん・棟」とある。「棟」を調べると、『万葉集』『枕草子』などにも登場しており、①せんだんの古名、②和名をあふちと云う。近俗せんだんと云うが梅檀に非ず云々、③セングンの科の落葉喬木で建築材・家具材になる。香木の梅檀（白檀・紫檀）とは別——ということなどが判った。また今思いだした。中学・高校時代、セングンの木で作った高下駄で大道を闊

歩していたことを。

「樗木」は国語辞典・地名索引などに見えない鹿児島県独特の地名・苗字と考えてよい。『鹿児島県地名大辞典』（角川）の小字一覧には、樗木（出水市下知識・祁答院町蘭牟田）・樗木畑および樗木山（日吉町吉利）・樗木原（鹿屋市祓川町）・樗木段（福山町福山）の6例がある。すべてルビを振ってないが、追手木（加世田市内山田）という地名があるので一応「おうてき」と読んでよいだろう。昭和48年の『鹿児島県電話帳』に見える「樗木」姓の数は、加治木町(10)・出水市(8)・鹿児島市(8)・川内市(3)・西之表市(2)・指宿市・串木野市・始良町・菱刈町・東郷町・日吉町・吹上町各(1)である。地名・苗字共にあるのは出水市と日吉町だけである。さらに出水市の場合は「樗」一字の苗字も含まれている。

次のようなことを考える。室町時代〜戦国時代、明の商人で「樗」と云う人が薩摩国に住みついて帰化したに違いない。「樗」という木は「棟」のことと理解したのだろう。「おうち（あふち）の木」が舌足らずで「おうての木・おうてき」となったのだろうか。川内市歴史資料館に展示されている「樗木家所蔵の造船関係の文書・絵図面」を細かく分析すると、その手掛りがつかめるかも知れない。鹿児島県の地名・苗字には妙に古い時代の読みが残っている。「樗木」もその一例であろう。

（鹿児島県地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(6) 加治木

平田信芳

大河ドラマ『翔ぶが如く』は各種各様の西郷・大久保に関する本・雑誌の特集を生み出した。それらの中の一つに西郷・大久保が育った下加治屋町を解説したものがある。曰く「加治屋といえば、鍛冶屋からきた名前と思いがちだが、この加治屋町の名の由来は、加治木の入達鹿兒島城築城のとき、大挙して住みついたところからつけられたといわれる。始良郡加治木町の加治木は、かじ木という和紙の原料となる木が多いところからという説が有力だ。即ち、加治屋町の名の「かじ」は、始良郡蒲生町で現在も製造している和紙の原料名が由来なのである。」と。

『日本地名索引』所収の地名でこの問題を分析してみよう。和紙の原料となる「楮」の付く地名は、楮(岡山)・大楮(佐賀)・楮原(福岡)・楮佐古(高知)・楮木(高知・熊本)などである。「かじき」という地名は加食(島根)・鹿喰(福岡)・楮木(前掲の高知・熊本)・梶木(長崎・宮崎・熊本)・加治木(鹿兒島)などになる。「楮木」が二例あるので一応の説得力はある。「かじや」

は鍛冶屋20・鍛冶屋敷10・加治屋4・梶屋3・梶矢(1)などで「鍛冶屋」に由来する地名が大勢を占めている。

次に、『鹿兒島県地名大辞典』(角川)の小字一覧から「かじ」地名を拾ってみた。加治屋40・加治25・鍛冶屋20・鍛冶(8)・カジヤ(3)・可次(1)で、ほとんどが「鍛冶屋」にもとづく。この数値をみると、鹿兒島の「加治屋町」が加治木からの移動地名とすることに無理を感じる。「楮」の付く地名は楮山(串木野)・楮場(横川)・楮畑(穎娃)・楮谷平(穎娃)・楮掘(知覧)・楮久保(中種子)・楮ヶ元(上甕)・楮ノ元(祁答院)の8例で、「楮木」という地名例が鹿兒島県にはない。「楮」の付く地名は梶原(11)・梶畑(2)・梶ヶ平・梶の丸・梶の場・梶尾・梶田・梶石・梶ヶ重・梶木の各一例。梶には「舵」と「楮」の意味がある。注目に値するのが加治木畑(国分市野口・松木)と加治木町(国分市松木)。加治木畑を楮木の植生地名と解釈出来れば和紙の原料に由来することになるのだが、加治木町が解釈の邪魔となる。

「加治木」の雅称は「舵城」。これは天磐椽樟船の舵が根付いたという蛭児伝説と結びつく。舟木・櫓木という地名は用材の産地に由来する。舵木という用材の産地地名があってもよい。なお、カジキマグロは鋭い上顎で船の底板を突き破ることからその名が付いたという。

(鹿兒島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(7) 桐野

平田 信芳

桐野利秋。西南之役の事実上の指揮官である。総大将は西郷隆盛だが、西郷さあはかつがれただけで実際は「桐野どんの戦(いっさ)」と理解されている。このことに疑問を感じるが、それはさておく。城山で戦死した時は西郷隆盛四十九歳、桐野利秋三十九歳であった。明治維新をになった人々の若さはうらやましくもあるし、敗れたりとは云え一万三千の薩南健児を率いて七ヶ月間、日本史上最大の内乱を起したエネルギーは注目し値する。桐野どんの戦の最終日すなわち城山最後の日を明治十年九月二十四日と太陽暦中心に考えているが、歴史を偲ぶ場合は旧暦にも意を払うべきである。明治十年九月二十四日は旧暦八月十八日。その前夜は「立待月」。十五夜・十六夜・立待月を薩軍の将兵はどのような気持で眺めたのだろうか。朱欒の方々に「立待月」の句会を城山の洞窟前で開かれたらとお薦めする。

桐野はいまでもなく桐の木を目印とした植生地名であり、それにもとづいた苗字と考えられる。桐木(始良町・笠沙町・川辺町・根占町・末吉町)・桐木迫(喜入

町・大浦町・知覧町・祁答院町)・桐原(喜入町)・桐木平(加世田市・知覧町)などの小字はあるが、桐野は残念ながら見当たらない。ただ「桐野道」という地名が阿久根市折口にある。電話帳を見ると「桐原」が圧倒的に多く、「桐野」はその次になる。昭和48年鹿児島県電話帳の「桐野」姓を拾ってみた。出水市(2)・鹿児島市(11)・長島町(7)・高尾野町(4)・末吉町(4)・吾平町(3)・東町(3)・栗野町(3)・鹿屋市・川内市・国分市・指宿市・始良町・財部町・喜界町・徳之島町各1例である。その他では桐原(川内市24例・栗野町12例)・桐木平(川辺町16例)・桐田(開聞町5例)などが目立つ。これらは本貫の地をそれぞれ推定させる。地名と苗字の分布から考えると、「桐野」氏の出自は出水郡にあったと見てよいだろう。

桐野利秋の先祖に桐野九郎右衛門という人物がいた。慶長十五年(一六一〇)島津家久の内命で島津義久の家老平田太郎左衛門増宗を入来峠で狙撃して肥後国に隠れ、ほとぼりが冷めてから薩摩に復帰している。義久直系の擁立を考えていた平田増宗の死によって鹿児島鶴丸城は安泰となったが、逆に舞鶴城は義久の隠居所としての城となってしまった。桐野九郎右衛門と桐野利秋、先祖も子孫も薩摩の歴史に大打撃を与えたことになる。舞鶴城址の桐の一葉はそんなことを語りかける。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(8) 柎 原

平田 信 芳

平成元年八月末、南日本新聞の「ひろば」欄に「垂水市柎原が何故クヌギバルとよばれるのか。柎はヒイラギと読み、クヌギの読みはない」との問題提起があり、議論が続いた。これに触発されて「柎」地名の検討を重ね、その成果を先般刊行された小野重朗先生傘寿記念論文集『南西日本の歴史と民俗』に「柎原という地名」の題で載せて頂いた。以下、その要約である。

漢和辞典・国語辞典・古事類苑・和名抄などに当たって拾い出した「くぬぎ」と読む漢字や国字をまず列挙する。

- | | | | | | | | |
|---------|-------|--------------------|----------|-------|------|------|------|
| 1 櫪(歴木) | 2 櫟 | 3 櫟樹 | 4 釣樟(鳥樟) | 5 櫟 | 6 | | |
| 7 柎 | 8 柎 | 9 柎 | 10 櫟 | 11 麻櫟 | 12 柎 | 13 茅 | 14 |
| 15 柎 | 16 柎 | 17 柎 | 18 柎 | 19 柎 | 20 柎 | 21 柎 | 22 柎 |
| 23 此木 | 24 国木 | 25 柎(問題の出発点となった文字) | | | | | |

「柎」という漢字は、漢和辞典や国語辞典による限り、「しゅう」と読み「ヒイラギ」の意味である。たまたま私が持っている文政九年(一八二六)刊の『節用集』(室町〜江戸期の辞典・便覧の類)に、現行の漢和辞典・

国語辞典に見られない「よみ」が載っていた。「柎(とう)」というよみである。冬がつくりになるので「よみ」としては常識的に理解できるものであり、首肯できるものである。ところが現行の辞典類には「しゅう」の音しかない。このことは「柎(とう)」のよみが採録もれになったことを示す。同様のことが「柎(くぬぎ)」のよみに考えられないかという発想が問題解決の出発点となった。例の如く全国の「クヌギ」地名と鹿児島県内の「柎」地名をリスト・アップした。

全国の「クヌギ」地名の中では「柎」という国字を用いたものが最も多く、この「柎」地名を除くと、国木・樟原・歴木・櫟田・柎原などか特異な例として残る。歴木の表現が『日本書紀』に見えることから、これらは古い時代の「よみ」と考えられ、柎原の「よみ」は古い用例の残存とみなされる。

鹿児島県内の「柎」地名79例中約70パーセントにあたる55例が「くぬぎ・くのき」と読む地名である。論文執筆時は67例中46例としたが、その後の地名カード作成の過程で採録もれに気付いた。まだ見落としがあるかも知れない。それはとも角としても、鹿児島県内の「柎」地名の中で「くぬぎ」と読むものが約50例もあること自体、元々「柎」に「くぬぎ」のよみがあったことを物語る。「柎」は「くぬぎ」の当て字ではなかったのである。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(9) 毛梨野

平田 信芳

アイウエオ順に植物に因む地名をとりあげて来たが、「け」になって立ち往生してしまった。鹿児島県の「け」の付く地名は難物ぞろいということのを忘れていたのである。花熟里(けじゅくり)・計志加里(けしかり)・祁答院(けどういん)・検校川(けんこうがわ)など、いずれもその由来がはっきりしない。鹿児島県の地名に關心を持った者が最初に首をひねるのは、花野(けの)・花棚(けだな)・花倉(けくら)と鹿児島市北方の吉野台地に並ぶ地名である。奄美を眺めると、花天(けてん)・花徳(けどく)・花富(けどみ)・花良治(けらじ)などの地名が増える。下の方に付く例としては春花(はるけ)が県下に数例ある。苗字になると春花(はるはな)と読んだりする。いずれも「花」の字を用いているが、ほとんどは当て字である。古代・中世の日本語には、「け」「うち」「ひき」など、形容詞や動詞に付く接頭語が多く見られる。「け」にはそのような用例があることを考慮してよい。鹿児島弁には多くの古代語が残存しており、その視点で見ると、また面白い。

櫻(けやき)・芥子(けし)などがあるが、それらの植生にもとづく地名例は少ない。「槻」は「けやき」とも読むが、地名では「つき」「つきのき」と読む場合の方が多し。困り果てた挙句、国分高校の近辺にある「毛梨野・毛梨子野(けなしの)」「毛梨迫(けなしさこ)」という地名を取扱うことにした。これらは国分市川原の小子である。付近に梨子ヶ野(国分市郡田)・梨子迫(国分市清水)・梨子ヶ迫(国分市郡田)という地名もある。これらは「毛(け)」が付くか付かないかの差違にすぎない。

『日本地名索引』を引くと、毛無島(宮城・和歌山・福岡)、毛無岳(北海道)、毛無森(岩手)、毛無山(北海道(6)・青森(2)・宮城・秋田・新潟(2)・長野(4)・鳥取(2)・岡山・広島)などの類似地名がある。『地名用語語源辞典』は、①ケ(毛・木)・ナシ(成)で「木などのよく茂った所」。②ケ(毛・木)・ナシ(無)で「不毛地・禿山」など、と正反対の解釈を二つ掲げ、地名用語としては①の方が多しと思われる、としている。

国分市の毛梨野・毛梨迫・梨子迫・梨子ヶ野などを観察すると、「毛の有無にかかわらず、元々は禿山・不毛地・木の生えていない所」で、「毛(け)」はさらに意味を強めた表現であったと見られる。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(10) 小松原

平田信芳

三十年ぐらい前だったろうか。何かの研究会でラサール高校を訪れた。谷山塩屋の小松原海岸に学校があった。文字通り「小松原」すなわち小さな松原があり、良い環境だなど当時感心したことも記憶している。現在もラサール高校はその位置にあるのだが、小松原・海辺というイメージは全くなくなり、地名が本来もっていた誰も管理解できる意味を失ってしまった。地名は残っても環境の開発によって様相が変わってしまうことを示す好例でもある。

昔、海岸には随所に松原があり小松原があった。松原や小松原は消えても、まだ地名は残っている。私はそんな地名を拾いあげて昔日のおもかげを楽しむのではなく、実際は悲しんでいる。「松」に因む地名を列挙するところは一ページでは収まらないので、「小松」だけに限定して考える。

「小松」の付く地名には、小松・小松尾・小松崎・小松迫・小松城・小松田・小松原・小松平・小松本・小松山などがある。小松（こまつ）は大松（おおまつ・だい

まつ）または「松」の対照語として用いられる。大きな松・小さな松の植生地名である場合と、大松・小松という名前の有力者によって開発された名田（みょうでん）の名残りである場合とがある。また漢字三文字の地名となると、さらに解釈がややこしくなる。小松崎・小松城・小松田・小松本などは「小松」が目印となった地名と理解した方がよいが、小松尾・小松迫・小松平・小松山などは「小松」が主体になる地名なのか、ミニ松尾・ミニ松迫・ミニ松平・ミニ松山なのか、判断に苦しむ。それらの中で「小松原」はミニ松原と理解できる地名例である。その昔、小松原海岸を歩いた経験がそのように理解させてくれるのである。

小松（こまつ）。これを「おまつ」と読む人はいない。「小」には「お」「こ」の読みがあり、一般的には「お」の方が発生的に見ると古い。小川を「こがわ」と読む地方が稀にはあるが、「おがわ」と読む方がイメージとしてはよい。「春の小川はさらさら流る」、これが「こがわ」であっては困るのである。国分市上小川を（かみこがわ）と読む人があるが「かみおがわ」であり、平安鎌倉時代には小川院（おがわいん）の中心地でもあった。小野小町を「このおまち」と読む人はあるまい。「お」「こ」の差異の背後に、面白い歴史が秘められているようだ。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(11) 桜島

平田 信芳

昔、袴腰はかまごしに桜の木が多く植えられていた。桜島港の背後に当たるところから、桜島へ向う船を眺めているうちに、おのずと桜の林に視線が移り、満開などと想像出来るほど鮮かな色だった。この桜から桜島の名前が付いたのだらうとも思っていた。しかし、調べてみたら「桜島」という地名の由来は、そんな単純なものではなかった。

まず鹿児島県に桜島姓がない。すなわち、桜島さんと呼ばれる人がいないのである。このことはその地名の発生が新しいことを物語る。鹿児島さんもないが、こちらの方は起源が古い。桜島命名の由来を示すものとして次の史料が知られている。

桜島池田氏蔵年代記（旧記雑録後編二、No. 318）

一、元禄十一年寅十二月廿四日、向ノ島ヲ桜島ト唱可申旨、御意ノ由被仰渡候

この史料によると、桜島の正式命名は元禄十一年（一六九七）、命名者は第二十代藩主島津綱貴であることが判る。將軍綱吉に「島ミカン」を献上するにあたり、「桜島」の名称を選んだとみられる。それ以前の名は、

「向ノ島（むかいのしま）・向嶋（むこうじま）」であった。向嶋姓は県内でよくお目にかかる。

桜島の正式命名は元禄十一年であるが、それ以前にも十六世紀の初め頃から文人墨客たちの間で文学的雅称として「桜島」のよび名が用いられていたようである。『拾遺和歌集』巻九に収められている大隅守桜島忠信の前で白髪しらげの郡司が詠んだ歌「老はて、雪の山をはいた、けとしもとみるにそ身はひえにける」にもとづいて桜島のよび名が付けられたと解釈されている。「雪」と「霜」との対比、さらに「霜」と「答（しもと）」の懸詞がもてはやされ、大隅守桜島忠信の名に付会した雅称が生じたのであろう。

大隅守桜島忠信の名が『拾遺和歌集』や『今昔物語』に記されていることから、「桜島」という名の島（植生地名）がどこかにあったと考えてよい。大阪市此花区このはなに「桜島町」という地名があるが、『大阪府地名大辞典』（角川）によると、明治三十三年以降の地名と説明があるのみで、取り付く島もない。桜島という地名の由来については『単人文化』第15号（昭和59年）掲載の「桜島考」で桜島の古名が鹿児島ということも既に論究してあるので、詳細はそれによらねたい。どうも袴腰の「桜」が気になるが、鹿児島島のシンボルである桜島は植生による地名ではなかった。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(12) 塩 杣

平 田 信 芳

鹿児島市街地から吉野台地へのぼり、九州自動車道吉田インターチェンジに向かうと、吉田インターチェンジの近くに「塩杣（しおそま）」というバス停がある。吉田町一帯は海岸から離れた山の中にあるのだが、「宮之浦（みやのうら）」とか「佐多浦（さたのうら）」という集落があったり、「塩杣」という地名があったり、これは一体どうしたことか地名研究会の例会で質問が出た。鹿児島県の山奥に存在する「浦」地名は『万葉集』に多くの用例が見られる「末（うら・うれ）」にもとづく地名で、海岸に見られるものとは関係がないとすぐ答えられたが、「塩杣（しおそま）」という地名は初めて耳にしたものだったので、「杣山（そまやま）」と関係があるのかなと、その場はお茶を濁す形となった。

その後実際にバス停「塩杣」のそばを通り、横書きの標識を車の上から眺めた時、「塩木山（しおのぎやま）」の三字が「塩杣」と二文字化されて、読みも「しおそま」に変化したものであることにすぐさま気付いた。縦書きの「塩杣」では容易に気付かないが、横書きを見てなる

ほどと納得した。横書きも右から左へ書いた時代では「杣」の字は生まれないので、左から右へ横書きするようになったから生じた変化地名である。

昔は薩摩国・大隅国共に有数の塩の産地であった。製塩を営んだ「塩浜」「塩屋」などは燃料供給地である「塩木山（しおのぎやま）」と密接に結び付いていた。製塩用の燃料は火力の強い松が用いられ、五〇町歩の塩田に対して約三八〇〇町歩の松林・松山が必要とされたので、県下の随所に塩木山および松山などが存在していた。漁村と山村は塩と薪物たきものというラインで結びついていた。イオン交換膜法という近代的製塩法は全国各地の塩田を消滅させ、漁村だけでなく山村の息の根もとめてしまい、過疎化に拍車をかけてしまったのだった。

明治維新に際し倒幕の中心勢力となった薩摩・長州の経済的背景は「薩摩の黒砂糖・長州の塩」とよく言われる。幕末・明治初期の塩田面積は薩摩国は一八四町歩、大隅国は資料不足で不明。周防国・長門国の塩田面積は二一七町歩である。面積を比較すると似たりよったりであるが、薩藩の塩については何故かその財力の裏付けになつたとは評価されていない。塩業にもとづく財力はどこに消えたのか。これも「翔ぶが如く」だろうか。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(13) 菅の里と菅原

平田信芳

国分市府中に「菅の里」という小字がある。「すげのさと」と読むのであろう。歌枕に用いられたような地名である。また「菅原」は「すがはら」と呼ぶ場合と「すがわら」と呼ぶ場合とがある。「すげ」と「すが」、「すがはら」と「すがわら」の違いが以前から気になっていた。『日本国語大辞典』を引くと、菅(すが)は菅(すげ)のこと、菅原(すがはら・すがわら)は菅(すげ)の生えている原、菅(すげ)はカヤツリグサ科の植物の総称と説明がある。発生的なことは説明不十分である。微妙な差異を理解するために『日本分県地図地名総覧』から主要な「菅」地名を抽出してみた。

菅または〇〇菅の場合、ほとんどが「すげ」と読む。菅(すげ12例・すが2例)・大菅(おおすげ4例)・小菅(こすげ7例)などである。「菅」が上に付く場合、菅沢(すげさわ11例・すがさわ2例)は「すげ」が優位だが、他は「すが」が卓越する形となる。菅田(すげた4例・すがた6例)・菅谷(すげのたに2例・すがたに8例)・菅谷(すげがや1例・すげのや3例・すがや16

例)・菅野(すげの3例・すがの11例)・菅原(すげばる1例・すげはら1例・すがわら10例・すがはら21例)などであるが、菅生(すがお3例・すこう19例)・菅沼(すがぬま13例)となると「すげ」の読みは消えてしま

う。これらを考えると「すげ」が言葉としては先行し、「すが」は後発とみなされる。菅原の場合、「すがわら」は「すがはら」の転化であることは異論がないので、「すげばる」すげがはら→すがはら→すがわら」と変化したことが地名例から考察出来る。視点を変えてこれらの言葉の古典での初出を検討すれば言葉の変化の歴史が眺められるだろう。

カヤツリグサは菅沢(すげさわ)・菅谷(すげのたに・すがたに)・菅沼(すがぬま)などの湿地帯に多く見られることが地名から理解出来る。鹿児島県内の「菅」地名では、84例ほどのうち菅牟田(すげむた2例・すがむた29例)・菅谷(すげのたに1例・すがたに9例)が目立つ。菅牟田が他県の場合の菅沼に対応する地名となるようだ。ただ『鹿児島県地名大辞典』小字一覧にみえる「菅」地名は「管」と書いているものが多い。40例をくだらないミスであり、すがすがしい気になれない。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(14) 芹沢と芹牟田

平田 信芳

「芹」の名をはっきり知ったのは小学校三年。七種粥によってである。鹿児島語では七種粥を「なんかんずし」という。これは「七日の雑炊」が変化したものといわれる。また特に女の子の正月七日の祝いを「ななげ」というが、「なんかんずし」を「七家（ななけ）」から貰う七歳の粥すなわち「七粥（なながゆ）」によるのか、あるいは「菜粥（なのかゆ）」にもとづくものであるのか、その由来を知らない。ところで、「芹なずなごぎょうはこべら仏の座、すずなすずしろ春の七草」という歌どおりの七種粥にお目にかかったことはない。芹と大根（すずしろ）の他は、人参・ごぼう・里芋・もやし・油揚・餅などが主な中身である。「芹」が主役であることだけは変っていない。

その頃知った幕末の剣客は清河八郎であったり、芹沢鴨であった。それに怪傑黒頭巾がいた。七種粥を通して芹を知った頃だったのでくに芹沢鴨に惹かれた。清河八郎や芹沢鴨が新撰組を作ったのだが、現在は近藤勇や沖田総司に人気が集中している。近藤勇は昔も登場したが最近のように長曾祢虎徹を振り回すことはなかった。

また頭巾の色も「黒」から「赤」に変わってしまった。

「芹」の付く地名を『日本地名索引』『日本分県地図 地名総覧』から拾ってみたが、意外に少ない。北海道・青森・岩手・群馬・東京・静岡・愛知・岐阜・福井・三重・和歌山・兵庫・鳥取・島根・岡山・広島・香川・徳島・高知・佐賀・長崎・沖縄の二十二都道府県では気付かなかった。44の抽出例中、「芹沢（せりざわ・せりがさわ）」が12例で最も多い。芹沢鴨の名前と妙に符合する。二位は芹田（せりだ）の7例。また44例中、滋賀県彦根市に芹川・芹中・芹橋・芹町の4例あるが目立つ。県内の「芹」地名も少なく、『鹿児島県地名大辞典』から芹牟田(7)・芹迫(2)・芹場(2)・芹尾・芹ヶ野・芹谷・芹房・芹町・芹見・芹ノ元・芹涉瀬などを拾い出せた。芹牟田7例は突出している。芹ヶ野はいうまでもなく串木野金山の所在地である。

『日本国語大辞典』によると、その語源は、①一所にセリあって生えるところから、②煮て食べるとセリセリ音がするところから、③河の瀬にあるところから、などの諸説がある。地名を整理してみると、芹沢・芹牟田・芹田などが多く見られ、湿地にその植生があることを示される。名は体を表わすと云えよう。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(15) 杣麦の鼻

平田信芳

もり・かけ・ざる・月見・おかめ・たぬき・天そば・鴨南蛮など、そばのメニューも指折り数えてみると結構多い。最近ではさらにそばボーロ・そばまんじゅう・そば焼酎まで加わって来た。数年前、旅のつれづれに大分で買ったそば焼酎のうまさに関心し、特急にちりんに揺られながら鹿児島までちびりちびりなめたこともあった。芋焼酎はそば焼酎に客を食われるかも知れないと、その時ふと思った。その後、入院手術という事態に直面してタバコとも焼酎とも縁を切ったので、芋焼酎・そば焼酎の売れゆきには無関心になった。芋もそばも鹿児島県の特産物なので無関心であってはいけないが。

縄文晩期の遺跡からそばの種子が出土したとの報告例があるが、日本で栽培が一般的になるのは古墳時代のことであり、文献では『続日本紀』の養老六年（七二二）七月戊子の条にみえるのが初見である。元正天皇の詔に「勸課百姓、種樹晚禾、蕎麦及大小麦（百姓に晚禾・蕎麦及び大麦・小麦を植えることを勧め課せ）」とあり、救荒用作物の一つとして奨励されていたことが判る。もともとは中央アジア原産で、中国から朝鮮半島を経て日

本に入って来た。東アジアの国々の他にシベリア・ポーランド・カナダ・インドなどでも栽培しているが、そばを主食としている国・地域はない。調理法もそば粉に熱湯を注いで掻き回す蕎麦掻（そばがき）が主である。四十数年前の敗戦後の日々、醤油をちよっぴりつけて食べた蕎麦掻の味はおいそれと忘れるものではない。しかし、そばと云えば普通は「そばきり」のことで「うどん」と共に江戸時代以降一般的になった食べ物である。

夏から秋にかけて畠の旁（そば）の痩せた土地に植えられ、ひよろひよろと四・五十センチの高さに伸びた赤い茎、白い花は印象的である。収穫の状況を見たことはない。二〜三ヶ月という短期間の栽培でことが済むようである。そのためか地名になりにくい。地名カードを見ると鹿児島県内にある「ソバ」が付く地名は蕎麦久保（福山町福沢）・蕎麦角（山川町福元）・杣麦の鼻（中種子町油久）・蕎麦ヶ野（市来町川上）の4例だけのようである。ルビがあるのは「ソバガノ」だけ。中種子町のもは「ソمامギノハナ」と読むのであろう。云うまでもなく「ソمامギ」はそばの古名。種子島の地名に古い言葉が残っていた。蕎麦殻の枕で皆気持ちよく眠っているのだが全国的に見てもソバ地名は少ない。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(16) 榊子山

平田信芳

榊子山。西之表市伊関の小字名である。ルビを振るとすれば「タブコヤマ」となるのであろう。同類の地名にタブコ山（大口市青木・市来町川上）と榊香（薩摩町求名）がある。これらは榊の樹皮を粉にした榊粉（タブコ）に由来する。榊粉は線香の原料であった。榊・榊木・榊木迫・榊木平・榊木瀬戸・榊山など「榊」の付く地名を『鹿児島県地名大辞典』（角川）の小字一覧から64例ほど拾うことが出来たが『日本分県地図地名総覧』からは一例も拾い出せなかった。全国的には「榊」地名は少なく、鹿児島的な地名とみてよい。

中学時代、「榊」という苗字の同級生がいた。約千四百名の全校生徒の中で一番足の早い男だった。陸上部員であると同時に、ラグビー部に頼まれるとウイングをつとめる男だった。彼がいたことから榊のよみは知っていたが、どんな木であるかは知らなかった。

一昔半前のことになる。昭和五十一年、釘田遺跡第8地点（鹿児島大学理学部）発掘調査の時、河床遺跡という性格から数多くの流木・風倒木、無数の木の葉が出土した。樹種はタブ。ヤブニッケイともいうと教えられた。

地表下4メートルの地下水に守られて葉は緑色を少し残していた。ホースでそーっと水をかけながら木の葉を洗い出して行ったが、この世の空気に触れさせたために千数百年間保たれて来た緑が失なわれて小一時間もすると枯れ葉色に変る現実に直面した。ピタミンC液に漬けておけばとの話も出て試みたが効果はなかった。この時はショックで無常観を感じるだけだった。

この時の無常観が一因になっているのだろう。ここ数年來あちらこちらをさすらい、石碑を尋ね歩いては碑文を写している。いろんな石碑とめぐり逢う。加治木町の性応寺の一角にある与謝野鉄幹・晶子夫妻の歌碑、鉄幹が幼い時に植えたタブの木とも出会った。その時初めてタブの木の全体像を知った。

老の身の相見てうれしをさなくて

加治木の寺にうゑしたふの木

わが手もて植ゑし二尺のたぶの木も

年経て訪へば三丈の幹

与謝野鉄幹は、明治十四年〜十五年、加治木で九歳〜十歳の日々を送った。歌は、昭和四年八月、四十数年ぶりに加治木町を訪れた時のものである。鉄幹手植えのタブの木も樹齢百年をすでに越えてしまった。榊子山・榊粉のことなどは今の世ではすでに忘却の彼方へ消え去ってしまった。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(17) 知者木迫

平田信芳

少々ウエイヴがかかったチシャという野菜のあることは知っていたが、地名カード作成作業を通して「チシャノキ」というものもあることを知った。ここでとりあげるのは云うまでもなくチシャノ木を目印とした地名のことで、県内に二十数例ある。

チシャノ木（阿久根市脇本・加治木町木田・吉田町宮之浦・入来町浦之名・宮之城町田原・大隅町岩川・輝北町諏訪原・末吉町二之方・末吉町南之郷・東市来町養母・東市来町長里・東市来町湯田）・チシャノ木ヶ迫（金峰町大坂）・チシャノキ谷（吹上町湯之浦）・チシャ木（笠沙町片浦・松元町直木）などはすなおな表現である。次は変化形で、その昔、村役場の人々が首をひねったり知恵をしぼったりした結果でもある。チチャ平（鹿児島市小山田）・知チャ上（鹿児島市小山田）・櫟ヶ丸（チチャノッガマル。川内市麦之浦）・知茶木ヶ平（蒲生町白男）・知車木段（高尾野町江内）・茶々ノ木野（上屋久町宮之浦）・智志屋ノ木（伊集院町猪鹿倉）・知者木迫（日吉町吉利）などは眺めていて楽しくなる。一方、辞典や図鑑などでチシャノキを調べると、樹木

の名称は複雑だと思い知らされる。「ムラサキ科の落葉高木。葉がカキノキに似ているので、カキノキダマシあるいはカキノハダマシともいう。とうびわとも云い、漢名は松楊。材は木目が美しく装飾材として利用される。樹皮はタンニンを多量に含み、チシャ染の染料として用いられた。若葉は食用となり、キク科の野菜であるチシャに似た味がする。名前はこの味に由来する。」以上の説明は理解出来るのだが、樗木おてきとも書くとか、白雲木はくうんぼくともいうとか、エゴノキもチシャノキともいうとなると、わけが判らなくなる。エゴノキを調べると、こはぜのき・ざとうのつえ・ろくろぎ、などの別名が登場する。県内には「エゴ」という地名は三十例ほど見かける。天降川あもりには「エゴ漁」という稚鮎を捕える独特の漁法も残っている。しかし、エゴノキという地名には気付かない。クロギという地名はあるようだ。

ムラサキ科とエゴノキ科と異なるのにチシャノキという同名異木があるのだから、樹木の名前は難しい。実物を知りたくなったら小学校の周囲を歩くとよい。いろんな樹種が植えてあり、しかも名札が掛かっているからだ。中学・高校の庭にはそんな木札などはない。受験教育には知者木などは不要とみえる。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(18) 月之木

平田信芳

国分市向花むけ小学校の東隣に月ノ木(つきのき)という小字があった。昔は月にヒキガエルがいるとか兎が餅つきをしているのだと子どもたちは教えられた。月之木はそれに近い地名だと錯覚しかねない。

同類地名を求めると、月木(国分市上井うわい)・月木前(始良町西餅田)・槻之木(西之表市国上)を見出すことが出来る。『日本分県地図地名総覧』では月之木(滋賀県犬上郡多賀町)・槻木(岩手県二戸市・宮城県柴田郡柴田町・秋田県南秋田郡昭和町・熊本県球磨郡多良木町・大分県下毛郡山国町)などを見出せる。これらの例から月之木は槻木・槻之木の変化形だと理解出来る。槻とは「けやき」の古名である。

ところで「けやき」と付く地名は時代的に新しい。漢字表記では槻けやま之あさ沢さわ(愛媛県)・樺けやき坂さか(山形県)の二例に気付いただけである。しかし、けやき台・けやき平・けやき坂などの仮名書き地名が最近流行している。埼玉・神奈川・兵庫・佐賀などの各県で新興団地に命名されている。云うなればナウイ地名。

月木ツキキ槻木ツキキということが判ると、次のようなことが解

けて来る。まず大隅町月野。これは元々「槻野」であったと理解出来る。桐野・杉野・松野・柳野などと同類の地名となる。次に鹿児島市の甲突川。『三国名勝図会』は「神月川または上月川を俗に甲突川と書いた」と説明する。神月・上月をカミツキと読まずコウツキと読めば、尚武の国らしく「甲を突く」にしたと理解出来る。元々は「神槻」が語源であったとみなされる。神は下に付くとカミと読む場合が多いが、上に付くと神代こうしろ・神坂こうさか・神戸こうほなどのようにコウと読む例がむしろ多い。神々しい槻木すなわち神槻こうつきにちなんだ地名だと解釈できる。兵庫県佐用郡上月町こうつきと長崎県下県郡厳原町上槻こうつきはこのことを類推させる地名例である。また鹿児島市吉野町に上神月・下神月・神月藪という小字もその昔あった。

今一つ「月」の付く地名を類別することが可能となる。大月(大槻)・小月(小槻)・高月(高槻・高付)・並月(並槻)などは「槻」にもとづくことが判る。月形(月方)・月丘・月ヶ瀬・月見・月出・月輪・秋月(名月)などは「月」に係る地名になる。二月田・三月田・羽月(葉月)・長月などは祭りの費用を捻出するための祭礼田と性格がはっきりして来る。三日月・指月しづきなど謎の地名も若干残るが。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(19) 黒葛原橋

平田信芳

鉄砲百合・天竺葵と思いつく花の名はあるが、テのつく植生地名は見当らない。アイウエオ順に進めて来て、テのところでお手あげになった。打つてがないのでツを続けることにする。手詰まりの時には手短かにわがやの近所の地名で間に合わせよう。鹿児島市清水しみず小学校の西南隅に清水町と春日町をつなぐ「つづら橋」がある。天保年間に岩永三五郎の指導で架けた一眼アーチの石橋が明治三十年代の中頃にはずされ、大正十四年にコンクリート橋になり、平成三年に再び作り変えられた。黒葛橋と書くものと思っていた。念のために見たら黒葛原橋と刻んであり、考え込まざるを得なかった。結局、「つづらばる」の所に架けた橋を「つづらばし」と名付けて「黒葛原橋」と表現したなと解釈した。

「つづら」は「葛・黒葛・葛籠」と書くのが普通で、ツヅラフジもしくはフヅラフジで編んだ籠・箱をさす。県内のツヅラ地名は黒葛(2)・ツヅラ(2)・葛籠(2)となっている。日本分県地図地名総覧では葛籠(9)・葛(7)とつづの一般的で、黒柱(山梨)・防己(和歌山)・綴町(福島)・九尾(奈良)・九折(石川)・十九洲(和歌山)・

廿原町(岐阜)・九十九曲(三重)などいろいろな表現がある。これらの中で「九十九」は九十九里浜・九十九島などは「くじゅうく」だが、九十九沢は「つくも」と読む。雲仙普賢岳の噴火で最近気付いたのだが、長崎県には九十九島が二ヶ所ある。佐世保近海のもの「くじゅうくしま」、島原沖のものは寛政四年(一七九二)の島原大變の時に押し出されて出来た島々で「つくもしま」と呼ばれる。つくもは「つくも髪」に由来するが「つづら」はその語源がはっきりしない。そこで次のように考えてみた。

①輝く・かがり火・加賀・足利、②雉子・木切れ、③くぐる、④けげんな顔、⑤ごごむ・ごごり、⑥さざえ、さざ波・さざれ石、⑦しじま・しじみ、⑧錫・鈴・涼む・雀・硯、⑨瀬々、⑩そそろ、⑪只・正す・直ちに・漂う・ただれる、⑫続く、鼓・つづめる・葛・葛籠・綴る、⑬届く・とどめ・とどのつまり、⑭幅・はばかり・羽ばたく・阻む派閥、⑮日々・ひびに垢切れ・響く日比谷、⑯吹雪、⑰へべれけ、などと並べてみると、つづらはくねくねと長く続くツヅラフジ及び長いツヅラフジを綴りあげた葛籠を表現したものと、ほぼ理解できる。たらたらたりよりも、ちらちらりの方が楽しいけれど、つらつらつらと考えてみた。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

植物に由来する地名

(20) 常盤

平田 信芳

私が生まれ、そして住んでいる鹿児島市清水町は、歴史の古い町だが市電は撤去され、衰退の一途を辿っている。市営バスの1番線と2番線が運行しているところをみると、ある程度の敬意は払われているようだ。2番線は清水町〜常盤町の路線である。常盤御前へのアタックは義朝と清盛にまかせて、私はその語源分析にとめよう。

結論的なことを先にいう。常盤は常盤木・常盤の松などに由来するめでたい地名(瑞祥地名)である。実際に常盤木がなくても、瑞祥地名は随時名付けられる。『日本国語大辞典』を引くと、①「とこいわ(常磐)」の变化した語、②常葉「とこは」、とあり、大伴家持の歌「八千種の花はうつろふときはなる松のさ枝をわれは結ばな」(万、二〇、四五〇一)を例示している。

十年程前、国分高校に常盤という苗字の生徒がいたことを思い出した。念のために小字を拾ってみた。常盤(鹿児島市・国分市上小川・国分市福島)、常盤田(鹿児島市小山田)、常盤迫(穎娃町御領)、常盤原(郡山町郡山)、常盤元(東郷町斧渕)、トキワ(竜郷町竜郷)

が県内の例である。『日本分県地図地名総覧』から一二例を拾うことが出来たが、ほとんどが常盤で常磐は六例にすぎない。地名を眺める限りでは国語学者のいう常磐(とこいわ)変化説はあやしくなる。一方、常盤という地名も北海道二一例(うち常磐が一例)が目立つ。東北・関東にみられる常葉の三例も少ないながら目立つ。鹿児島市の常盤町は『鹿児島県地名大辞典』によると明治四十四年に命名されたことである。国分市などにも見える「常盤」地名は未検討であるが古い地名とは考えられない。また現在でも大都市周辺部に「ときわ台」などの新造地名が次々に登場している。

『地名総覧』所収の一二二例以外にも収録されていない「ときわ」地名がその数倍(七〜八倍)はあるとみられるが、一二二例でも大勢は推定出来る。一二二例を白地図上に点で落とすと、北海道・東京近辺・名古屋近辺・京都近辺が「ときわ」地名の密集地帯になる。その反面、宮城・福井・和歌山・鳥取・広島・高知・佐賀・熊本・宮崎・沖縄の十県は「ときわ」地名が見られない。なお鹿児島県はこの分布図では点が一つである。

一年中青葉のみられる常盤木にあやかりたいことから、明治末年以降、人気が出て来た地名とみてよいだろう。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(21) 奈良

平田 信芳

「奈良」の語源説は①「たいらにならす」に由来する、②山中の緩傾斜地や小平地を意味する（柳田国男説）、③国土・都を意味する古代朝鮮語のナラにもとづく、④榎の木が生えた所をいう、の四つに大別される。①説は『日本書紀』崇神天皇の巻にある「武埴安彦の反乱を討つために官軍が那羅山に駐屯した。その時兵士たちが草木を踏みならしたので那羅山というようになった」との地名説話を引き合いに出す。②説は柳田国男説で最も支持者が多い。地名のほとんどは地形地名であるのみならず人々は④説の植生地名は考えられないとして見向きもしない。③説は全国的に「ナラ」地名が見られることから「都」と結びつけられない。

私は少数意見の植生地名説の立場で孤軍奮闘している。薩摩っばは昔から孤軍奮闘が好きなのかも知れない。実をいうと『植物に由来する地名』シリーズは④説の実証をねらいとしている。「風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける」に歌われた「なら」は「榎」と「奈良」の懸詞だと思ふのだが、そのような解釈は地

名研究では成立たないというのが「地形地名」を盲信する人々の云い分である。

鹿児島県の小字から「奈良・榎」地名を拾うと、奈良木・榎木(14)、奈良迫・榎迫(8)、奈良脇(4)、奈良原(3)、奈良野(2)、奈良(2)、奈良田・榎平・奈良尾・奈良袂・ナラ谷・榎丸・奈良松・奈良女木各1例である。榎丸は人名に由来し、奈良松と奈良女木は「ならめる」に由来するものかも知れない。「ならめる」は鹿児島語で「平らにする」の意である。辞書にもないが古代語とみてよい。奈良田は「ならした所」とみる①説と解釈することも出来るが、榎田は梅田・榎田・柿田・栗田・桑田・桜田・笹田・柴田・杉田・竹田・槻田・梨田・藤田・松田・柳田などと同類とも解釈できる。同様に類似例を「木」地名で眺めると、梅木・榎木・柿木・柏木・栗木・桑木・桜木・杉木・槻木・梨木・藤木・松木などは梅田く松田と共通する。この他に桂木・栢木・椎木・橘木・榎木・栃木・朴木・桃木・柚木などがあり、「榎木」は植生地名とみなしてよい。鹿児島県の特徴的地名の一つ「迫(さこ)」についても同様なことが云える。梅迫・萩迫・柿迫・葛迫・栗之迫・桑迫・笹ヶ迫・椎迫・竹迫・萩迫・桃ヶ迫・柳迫など「榎迫」と同類の植生地名も多い。「奈良迫」は云うまでもなく「榎迫」の変化形である。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(22) ニガキ

平田 信芳

ナ行の植生地名には難儀させられる。ナは檜・茸（なば）・菜摘などがあるのでなんとかなるが、ニ・ヌ・ネ・ノと来たら難物ぞろい。ニは萑・楡・人參と思いつくが、にんじんとつく地名はまずない。結局「苦木（ニガキ）」を選択したが、ニラ・ニレの方が類例の数を考えると処理し易かったかもしれない。

『鹿児島県地名大辞典』（角川）の小字一覧から苦木（加世田市内山田）、ニガキ（宮之城町田原・蒲生町漆）、苦木迫（串木野市荒川・川内市久見崎・大浦町大浦・田代町川原・加世田市津貫・串木野市上名）、ニガキ山（加世田市津貫）、苦木ヶ原（串木野市上名）、苦木段（川内市高江）、ニガキハエ（栗野市恒次）などを拾い出した。苦木の樹皮・葉・実などは「良薬は口にながし」を定着させた胃腸強壮剤の最たるものだったのであろう。最近にはがい薬など姿を消してしまった。それと並行して苦味ばしった男も少なくなったようだ。

甘い・酸い・（塩）からい・にがい・辛い、がいわゆる五味。その他に渋い・渋味があるが、味つけからは敬

遠される。しかし地名に関しては「渋」地名が最も多い。渋川・渋田・渋谷（しぶや・しぶたに）・渋民・渋沢・渋佐・渋沼・渋井・渋垂・渋江・渋見・渋倉・赤渋など、湿った所に立地する地名が多い。昔の人は水をなめて名づけたのだろう。なお、渋木という地名もあるがこれは波のしぶきの当て字とみられる。

五味のうち地名に直接結びつくものは甘いとにがい。伊豆の天城山・摂津国天城郷・上総国甘木郷・肥後国天草（甘草）なども甘味材料の産地としての視点から眺めることも必要だろう。甘木という地名は現在でも福岡県甘木市をはじめとして福岡・佐賀・長崎・熊本各県に集中的にみられる。その昔、甘木を煮つめて甘葛煎（あまづら）を作ったのであろう。甘木・甘草を植生地名とみる地名研究者は少ないが、苦木が存在するのであるから対照的な地名は当然考えてよい。

酢という地名もあるが例は少ない。昔の人々は柑橘類および梅酢を用い、それと塩でよか塩梅に味つけをしたのだらう。「塩」と「梅」の地名は数多いが直接味とは結びつかない。辛味の歴史を振り返ると、大根おろし・ワサビ・辛子蓮根・七味唐辛子などが主流であった。最近では各種のカレー・ソース・スパイス・塩胡椒・キムチ・辛子メンタイなどと味も多彩となった。しかしこれらも地名とは結びつかない。（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(23) 塗 木

平田 信芳

「ぬるで(白膠・白膠木)」という木はあるが、地名には今まで出会わなかった。知覧町にだけある「塗木」という地名および苗字に取組む以外に方法はないと考えて、鶴丸高校の塗木先生(日本史担当)に尋ねた。大崎町野方と串間市に「塗木」という地名があるが、これらは薩藩の人配政策によるもので、知覧から移動した地名だろう。塗木は国語学的には「ヌリキ」と読むべきもので、「ヌルキ」というのはよく判らない。知覧町の塗木一帯には漆の木もないし、木地屋がいたとの伝承もない。植物地名と考えない方がいいのではないかとのことだった。

『広辞苑』を見ると、塗足駄・塗板・塗絵・塗扇・塗桶・塗替・塗壁・塗木(ぬりき)・塗櫛・塗葉・塗下駄・塗輿・塗込・塗師・塗机・塗大工・塗立・塗潰・塗箸・塗筆・塗盆・塗机・塗物・塗椀等、すべて「ぬり」と読む。国語学的にはなるほど「ぬり」一色である。しかし突破口が一ヶ所顔を出していた。「ぬりで(白膠木)↓ぬるで」がそれである。

『草木名彙辞典』をみると、「ぬるで。ウルシ科の落

葉小高木。白膠木(ぬりで)・農利塗(ぬりで)・白膠木(ぬるでのき)・白膠木(ぬりでのき)」とあり、その他に三十七ほどの別名を列挙してあった。さらに「和名は樹液を器物に塗ったところからという」と説明している。これらのことから「ぬりで・ぬるで」「ぬりき・ぬるき」という表現が昔は存在していたと考えられる。

知覧町の地名に立ち戻って考察する。近世の知覧郷東別府村に「塗木門」が存在した。これは「ぬるきかど」と読み、この門名から塗木という苗字が発生したと考えられる。『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小字一覧をみると、知覧町西元に塗木後・塗木西の下・塗木西上という小字がある。さらに同じ西元に、塗手迫頭(ヌリテサコカシタ)・塗手ケ迫尻(ヌリテガサコシリ)・塗年ケ迫(ヌリネンガサコ)という小字がある。これらを見て嬉しくなった。塗年ケ迫は「塗手ケ迫(ヌリテガサコ)」の誤記であり、さらに「塗手ケ迫」に「頭(カシラ)」と「尻(シリ)」の分割地名を付け加えたものがこれらの地名であると解釈することが出来る。「ヌリテ」は云うまでもなく「ぬりで・ぬるで」のことであり、それらの植生地名である。塗木(ぬるき)も「ぬりで・ぬるで」と同類の植生地名とみなしてよい。「国語学的にはヌリキ」というとの塗木先生のヒントに感謝する。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

植物に由来する地名

(24) 「ネノ木」の話

平田信芳

「ネ」の付く地名は難物ぞろいである。阿久根・牛根・敷根・根占などが解釈できたら鹿児島県の地名研究は大躍進を遂げるに違いない。「ネギ」という地名があちこちにあるが「根木」や「柵宜」がほとんどで、これは神宮・神職のよび名の柵宜に因むものである。植生地名とは関係がない。全国を眺めると「ねぶの木」や「ねむの木」という地名もあるにはあるが、さらにある地名ではない。

『鹿児島県地名大辞典』（角川）から拾い出した地名カードに「ネノ木」という地名例が一つあり（大隅町大谷）、県内・全国に類例を気付いていないのでやりにくい。他に対象とすべき地名もないので取組むことにした。大隅町大谷の地名に手掛かりとなりそうなものはなにかと小字一覧を眺めていたら、「牛木田（ウシキダ）」という地名があった。これは面白そうだと思った。子ノ木・丑木（牛木）・卯ノ木（鶉木）・亥ノ木（猪木）などと同類ではないかと興味を持った。早速、大隅町社会教育課へ「珍しい地名例であること、十二支と結びつきの

も例は少ない」という趣旨の手紙を書き、一週間後にしかけることにした。

社会教育課を尋ねると、あいにく担当者は外出中。引継ぎを受けていた女子職員が「不ノ木」の間違いのようですという。二時間もバスに揺られて来たのに、がっかりさせる報告である。おいそれと引き下がれないので、確認のための三つの方法を提案した。①字絵図をみる。②大谷地区公民館に「ネノキ」か「フノキ」かを電話で尋ねる。③地名大辞典の大隅町執筆者に電話をかけて尋ねる、というものだった。

大隅町郷土館女子職員の案内で税務課へ行った。「ネノ木」であってくれよと念じながら字絵図を見たが「不ノ木」であった。てんで話にならない。大谷地区公民館へ電話する気持ちは吹飛んでしまった。朴木（フノキ・ホノキ）という地名ならば県内に数例あることを知っている。朴木という名字の教え子もいる。

往きが二時間、尋ね回り調べるのが二時間、用事が済んでバスを待つのが二時間、帰りが二時間という一日をつぶした調査行は『地名大辞典』小字一覧のミスの確認が収穫だった。「ネノ木何の木 気になる木」は筆のあやまりで、花も咲かない実もならない木でした。「ネ」の植生地名はね、あまり「ねえ」ということですね。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

植物に由来する地名

(25) 乃木

平田信芳

乃木静子夫人のことなど歴史の彼方に去った。乃木大将を知る世代も少数派となった。そのような中で乃木のルーツを調べようとするのだから天下泰平のなせるわざでもある。「ノギ」という名字にどんな文字を当てているかを『日本姓氏大辞典』（角川）でみると、乃木・乗木・濃宜・禾・能城・能木・能義・野儀・野喜・野城・野木の11通りがある。ゴシック体にしたものは地名も存在するので、ノギ姓は元々その地名にルーツがあるとみてよい。

『日本地名索引』『日本地名総覧』『日本分県地図地名総覧』の中からノギ地名を拾い出してみた。ただし乃木大将にあやかっけて付けた乃木という地名および「ノギ」と読む地名は除外した。

野木——①青森市野木・②青森県北津軽郡鶴田町野木・③栃木県下都賀郡野木町・④福井県遠敷郡上中町野木（上野木・中野木・下野木）・⑤鹿児島県西之表市安城野木・⑥同西之表市国上野木之平・⑦茨城県北相馬郡守谷町野木崎・⑧福島県石川郡石川町野木沢

乃木——①奈良県宇陀郡御杖村乃木・②島根県松江市

乃木福富町・浜乃木町

能木——①高知県安芸郡北川村能木

能義——①島根県の郡名②島根県安来市能義。和名抄に能義郡野城郷、出雲国風土記および延喜式に野城駅家が記されており、野義は古くから知られた地名である。

ノギの意味について「ノギはノゲ・ナギと同じく崖地をさす地名。類例は出雲地方にも少なくない」（古代地名語源辞典）、「ノゲと同系で崩壊地形・浸食地形をいうか」（地名用語語源辞典）などと解釈される。地名は地形地名が中心であるとか、危険地帯を示す地名を知る必要があるとかの解釈が現在盛行しているが、少々凝りすぎている。

野木・乃木・能義などの地名例をみると野木が圧倒的に多く、「野の木」に由来した命名と解釈するのがやはり自然である。『日本国語大辞典』（小学館）は「野原に生えている樹木」と説明し、「吉名よなばり隠の野木に降りおほふ白雪の、いちしろくしも恋ひむ吾れかも」（万葉・一〇・二三三九、作者未詳）を用例として掲げている。日本古典文学大系の解説を引用すると「吉隠の野の木々に降って覆っている白雪がはっきり見えるように、はっきり恋のそぶりを私は示してしまおうなあ」となる。地名研究も国語学が永年積みあげた成果をすなおに活用すべきである。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(26) 萩原

平田信芳

十数年前、始良町平松にある萩原遺跡を半年ばかり調査した。遺跡の名称は普通その所在地の小字名にもとづいて調査担当者が名付ける。その意味で萩原という地名には愛着を感じる。川岸に立地した古墳時代の集落跡であり、古代単人の生活を考察する上で多くの資料を提供してくれた。

萩原はハギハラと読むのが基本形であり、ハギワラは変化した形と考えられる。しかし地名や名字の場合、ハギハラと読むのかハギワラと読むのかは、厳密にはその土地の人または当事者でなければ判らない。ハギハラでもハギワラでも肯定的な返事をされると、どちらが正しいのか考えさせられる。近所に萩原どんがあるが、ハッギアラどんでも通用する。この点、鹿児島語は便利である。

最近では帰化植物やら遺伝子組替えによって培養された新品種がつぎつぎに登場し、花の種類や形態も色とりどりでますますはなやかにしている。古典で花といえは桜だが、万葉集までさかのぼると梅の花と芽子はぎが双壁であり、どちらかと云えば芽子を詠んだ歌の方が多い。次

のような芽子原の例もある。

丈夫まじろの呼び立てしかばさを鹿の

胸分け行かむ秋野芽子原

(万葉・二〇・四三二〇 大伴家持)

『鹿児島地名大辞典』(角川)の小字一覧にみえる「萩」地名は次のとおり。萩原(28)・萩平(12)・萩段(11)・萩峯(8)・萩迫(7)・萩塚(7)・萩尾(6)・萩崎(4)・萩谷(3)・萩元(3)・萩宇都(2)・萩窪(2)・萩ヶ瀬戸(2)・萩ノ園(2)・黒萩(2)。以下はそれぞれ1例のもの。萩・萩山・萩ノ岡・萩野々・萩ノ堀・萩溜・萩ヶ丸・萩嵐・萩畔・萩ヶ尻・萩ノ子・萩木場・中ノ萩・手萩。

『日本地名索引』ではハギハラ9例・ハギワラ29例、萩野15例がめだつ。『日本地名総覧』(角川)でハギハラとハギワラの違いを眺めると、①ハギハラと読む県(富山・滋賀・兵庫・鳥取・長崎)、②ハギハラ、ハギワラ両方の読みがある県(山梨・三重・奈良・和歌山・香川)、③ハギワラと読む県(福島・茨城・群馬・東京・千葉・静岡・愛知・岐阜・福井・京都・島根・広島・山口・徳島・愛媛・高知・福岡・大分・熊本・宮崎)に分けられる。これらを見ると、鎌倉時代に関東武士が全国に拡散したことによってハギハラからハギワラの転化が生まれたと推定できる。菅原の場合でもほぼ同様な結果がみられる。島津支配下の鹿児島はハギワラが主流なのだろう。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(27) 菱田と菱刈

平田 信芳

雛まつりの供えものに紅・白・緑の菱餅があるが、いまだに本物の餅に出会ったことがない。菱形の餅を三段重ねのまま一度は食べてみたいと子供の時から思っていた。水辺に生える菱も、菱の実もまだ見たことがない。そんなことで菱に対する思いは妙にひしげたものになっている。

曾於郡大崎町に菱田という大字がある。この地で志布志湾に注ぐ川を菱田川という。この菱田は、大隅国風土記逸文に「必志の里。昔は、此の村の中に海の洲ありき。因りて必志の里と曰ふ。海の中の洲は、隼人の俗語にて必志と曰ふ」との地名由来の説明がある有名な地名である。沖縄県の方言では現在でも洲をヒシ・ピシと呼んでおり、菱田は洲のよび名に由来する地名であるとすると解は不動のようにもみえる。しかし、風土記の説明はやはりおかしい。

比志の里・比志田（菱田）をそのように解釈すれば、菱刈とか比志島という古くからある地名の説明に困ることになるからである。小字を眺めてみると菱牟田（加世田市武田）・菱刈（川内市東手・西手）などがあり、こ

れらは菱の植生地名としか考えられない。鹿児島県にはないが、菱沼（宮城・山形・千葉・神奈川）とか菱野（愛知・岐阜）という地名もある。これらも菱の植地名とみるのが解釈としては妥当である。

『日本地名総覧』（角川）によると、菱田という地名は千葉県・新潟県・京都府にもある。さらに千葉県には菱沼、新潟県には菱潟・菱里、京都府には菱川・菱屋などの地名もある。なかでも京都府の菱屋は食用・薬用となる菱の実を売買した店に由来するもので、十か所ほど地名となっている。

『続日本紀』の天平勝宝七年（七五五）の条に「大隅国菱刈村の浮浪九百廿余人言はく、郡家を建てんと欲すと。詔して、之を許す」とみえるが、菱刈という地名は菱の実をとることに由来すると考えられる。万葉集には次のような菱の実とりの歌がある。

豊国の企救の池なる菱の末うゑを
採むとや妹が御袖濡れけむ

〈万葉・一六・三八七六〉

最近では平城京出土の木簡に「菱子一斗五升」と記したものがみつきり、奈良時代のはじめに武蔵国から菱の実の貢納があったことも判って来た。

菱田や菱刈で積極的に栽培・加工して、菱焼酎や菱の実を売り出したらとも思う。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

植物に由来する地名

(28) ふっが迫 平田信芳

福ヶ迫。「ふくがさこ」と読むが、鹿児島語の表現では「ふっがさこ」となる。福迫の場合は「ふくさこ」もしくは「ふくざこ」と読み、「ふっさこ」とか「ふっざこ」のようなつまった表現にはしない。

まず「福」の付く地名および名字を類別してみよう。福井・福岡・福島は県名にもある。福池・福浦・福江・福川・福沢・福田・福間・福良などは水と関係が深い。福石・福崎・福原・福森・福山などは幸福の意味あいがある。濃い。福市・福里・福地・福本（福元）・福村などは幸福を願う集落地名と考えてよい。福重・福武・福富・福留・福永・福丸・福満・福吉・今福・地福・大福・千福・万福・寿福・豊福・永福・吉福・善福などは、縁起のよい中世の開発者たちの名前が開墾した土地に付いてしまったとみてよい。

これらのうち、福山を「ふっきゃま」と鹿児島語で読むことがあるが、他はすべて「ふく」と読む。福良・中福良の場合は「ふくらむ」の意味あいも含まれているようだが、他はすべて福を招くことを意識して付けられた瑞祥地名に由来している。どの時代でも人々の願いは幸福であり、福を招く願いをこめたこの種の地名・人名は

数多い。

「ふっ」ということですぐ思い付くのが、「ふっの団子」。よもぎ餅・よもぎの団子を鹿児島ではそのように呼ぶ。蓬・艾を「よもぎ」と云わずに「ふっ」という。念のために『日本国語大辞典』（小学館）をみると、山口・福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎の各県でも「ふっ」と呼ぶ所があるらしい。蓬（ふっ）は九州各県に残っている古語とみなしてもよいだろう。ふつの団子を食うと福がやるとの語呂合わせではないようだ。『鹿児島県地名大辞典』（角川）から蓬（ふっ）に由来する地名を拾いあげてみた。どうしたことが、意外に少ない。

府津町……………出水市上大川内

蓬 原……………有明町の大字・指宿市池田

フツ原……………阿久根市脇本

黒 艾……………川内市城上

フツガ迫……………大浦町大浦

ところで、福ヶ迫（ふっがさこ）は「蓬ヶ迫」と考えるのが自然のようである。蓬の団子を食って満腹する方が庶民的感觉からは幸福だったと考える。なお、「吹（ふき・ふく）」の付く地名に「ふっ」とつまるものもあるが、大抵の場合は「ふき」である。「ふき」は落（ふき）の植生地名である場合が多い。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

植物に由来する地名

(29) 萇野

平田信芳

盆栽はいいものだと思いつながら、みずから手がけることはない。歴史的にみれば、その発生が貴族的趣味であり、大名達の手なぐさみだったからで、非生産的なものにはどうしてもなじめない。祖父も父も、蘭・万年青などをだいたい集めていたが、三代目はそれらを全部散逸させてしまった。誰が持って行ったか、いつ消えてしまったか、などの記憶も全然ない。ヘゴの幹に風蘭をあしらったものなど、風情があるのを知ってはいるが、こまめに世話することなどは性分に合わない。こと盆栽にかけては隔世遺伝の要素もなく、亀の子でもなかった。このような存在を世の人々は突然変異と呼ぶのだろう。

盆栽に対する興味はないが、地図を眺めてはあれこれと楽しむ空想家で、内之浦町船間がヘゴ自生地北限ということは知っている。しかし植物そのものにはあまり興味はないので、現地まで見に行っただけではない。

自生地の北限が鹿児島県であるので、ヘゴの植生地名は県外ではほとんど見当たらない。鹿児島県に特徴的に見られる地名とみなしてもよい。『鹿児島地名大辞典』

(角川)の小字一覧からその主なものを拾いあげてみた。

萇尾……加世田市内山田・加世田市津貫・東野町恒次・

吉田町宮之浦・喜入町生見・川辺町高田・川辺

町神殿・知覧町郡・知覧町東別府

萇山……出水市武本・阿久根市脇本・川内市西方・川

内市小倉・高尾野町江内・鶴田町神子・笠沙町

片浦

萇谷……吹上町与倉・吹上町湯之浦・穎娃町牧之内

萇野……阿久根市鶴川内・串木野市上名・東町鷹巣

萇迫……加世田市武田・市来町川上

萇下……阿久根市赤瀬川・鹿児島市西別府

萇小路……川内市高江・川内市久見崎

その他に萇段(鶴田町神子)・萇元(川内市寄田)・萇

牟礼(川内市高江)・内萇(蒲生町漆)・青萇(蒲生町白

男)・萇登(鹿児島市宇宿)・萇原(加世田市武田)・萇

平(加世田市武田)・萇崎(大浦町大浦)・萇割(笠沙町

片浦)などがある。

これらのヘゴ地名を眺めると、すべて内之浦町より北に位置している。このことは現在よりも暖かい時代があったことを物語っている。先日、阿久根市内の神社をめぐり歩いた。萇野という所に伊勢神社があった。ヘゴは生えていなかったが、今回の命題に気付いた。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

植物に由来する地名

(30) 朴ノ木 平田信芳

鳳仙花・ほおづき・蛍草・仏の座など、ホで始まる植物の名はいくつかはあるが、植生地名となると容易に見出せない。ない袖は振れないので、朴ノ木に登場願うことにした。

朴齒（ほおば）の高下駄と言えば、半世紀程以前の旧制高校生にはありふれた履き物であった。朴の木で作った高下駄。差し下駄とも云った。小学校の高学年になると中学生のはく長ズボンにあこがれ、中学生も上級学校のことを考えるようになると、高下駄を履く身分になりたかった。もっとも中学生が履く高下駄もあったが、セングンの木を材料として作ったもので、きめのこまかい朴齒の下駄に比べると貫禄の点で見劣りした。

高下駄の効用は、10センチほどばかり視点が高くなるだけだが、広く世間を見渡せるような気分になり、何となく優越感を覚えさせられるものであった。誰もが履けない高下駄。エリート意識を十分に満足させる小道具の一つでもあった。

そのようなことで、「朴」という字は「ほお・パク・ぼく」と読むものだと思ひ込んでいた。ところが国分高校で接した「朴木」という名字（国分市上之段出身）に

はびっくりさせられた。「ほおのき」と読むと、「ふのき」と答える。「ほう。ふのき」というと、他の生徒たち笑いだす。

いつも運ふの悪か男で、しかも穂ほのなか亭主であるので、鹿児島語でいう「ふ」と「ほ」の微妙な区別には何故だか感心させられていた。それに輪をかけたように「ほおのき」を「ふのき」と云われて、首をかしげた。国語辞典の類はすべて「ほおのき・ほほのき」で、「ふのき」という説明などは見当たらない。鹿児島語には古代の言葉が多く残っていると説いて得意になっていの方だが、「ほおのき」「ふのき」の違いは未だに説明を付けられない。以下、『鹿児島地名大辞典』（角川）の小字一覧にみえる「朴木」地名を列挙する。

朴ふのき木……国分市上之段

朴木原・朴木谷……国分市郡田

朴木・朴木渡……末吉町二之方

朴木山・朴木ノ上……末吉町岩崎

朴……末吉町諏訪方

婦ふのきノ木……吉田町本城

フノ木（鶴田町鶴田）・フノキ（始良町北山）・フノキ

原（松元町直木）・フノキガ宇都（鹿児島市犬迫町）

すべて「ふのき」と読みそうなものばかり。今回はホのない解説になりました。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

植物に由来する地名

(31) 「松」づくし

平田信芳

二昔半になるだろう。「松の木小唄」というものが流行した。松の木ばかりがまつじゃない。あなたを待つのもまつの内……。言葉遊びのような歌詞であった。『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小事一覽から「松」地名を拾い出して松づくしを楽しんでみよう。

まず目につくのが一本松、七本松。一本松65(壹本松10を含む)、二本松24(貳本松2を含む)、三本松38、四本松5、五本松25、六本松2、七本松1。地名のもつ性質から目印となるものが地名になる例が多いことを示している。関所の松でない五本松が鹿児島県に25か所もあつたのはいささか意外だった。千本松も国分市川原と上屋久町小瀬田にある。

以下、10例以上ある地名を列挙して紙数の許す範囲で若干の解説を付け加えよう。

松ヶ迫117(松迫11を含む)は抜群の存在。シラス地形から生まれた地形地名であり、最も鹿児島的な地名の一つでもある。松尾(松ヶ尾)92も多い。松尾は松岡と同じ意味と考えられる。松岡は2例しかないので移入地名で時代的に新しい表現とみられる。松原82、松山75、松

元70(松ノ元・松ヶ元・松本などを含む)などは海岸地帯に多い。また松ヶ元という表現が多いことから、松元は松の根元という意味から派生した地名とみてよい。その次に来るのが松下65。松下は松元よりは距離が離れた位置を示す地名とみられる。松上という地名は2例しかない。上よりは下の方が目に付き易かったのだろう。松崎43、並松37、松平30、平松29、涼松25、松木田23、高松21、飛松19、植松19(上松9を含む)、松坂19、赤松18、笠松17、小松16などが中堅クラス。松崎はマツサキなのかマツザキなのか。清濁合わせ呑む風土柄か、鹿児島語は清音・濁音の区別がはっきりしない。云うなれば「てげてげ」なものである。

続いて松久保13、松峰12、札松12、横松12、松バエ(松生・松八重・松葉江)11、松野11。また小松ヶ尾17、小松原10、小松山6、小松平6、小松元6というミニ型も結構数が多い。風変わりなのは横松。ヨゴマツとルビのあるもの、ヨング松と仮名書きにしたものもある。上の方に伸びずに横に伸びた松のことと理解できる。曲松(まがいらまつ)もこれと同類であろう。

源七松・源蔵ヶ松・清五松・八郎松・十郎ヶ松・長助松・甚右エ門松・甚左エ門松・彦左エ門松・孫左エ門松・矢太郎松などの地名も謎めいている。他にも約三百種類の「松」地名がある。松づくし、松はめでたし。

〔鹿児島県地名研究会世話役〕

植物に由来する地名

(32) 蜜柑山 平田信芳

ミカンについてはミカンジュースやミカンの花が咲いている思い出の道を思い出すのが現代風なのだろうが、歴史に首を突っ込んでいるためか、蜜柑船でもうけた紀国屋文左衛門のことなどをつい考えてしまう。時代がかっていると言われれば、その通りである。その昔、母の実家の庭に島ミカン（桜島ミカン）の木が数本あった。みる頃には祖母のご機嫌とりに行って腹いっぱい食べていたが、それも幼い日々の思い出だけのことになってしまった。

南国鹿児島にはいたる所にミカン山・ミカン島がある。「蜜柑山」という名字もあるので、ミカンに由来する地名も多いだろうと考えて探してみた。どうしたことか拍子抜けするほど少ない。

蜜柑島……垂水市新城

蜜柑河内・蜜柑河内山……知覧町郡

蜜柑山……根占町川北

キンカン・ボンタン・ハッサクなどと範囲を拡げてみたが、収穫はゼロ。ボンタンで有名な阿久根にもボンタン地名はない。阿久根文旦の起源は嵐に遭って漂着した

中国船の船長「謝文旦」がもたらした果実からといわれる。同時に名前の上の二字をとって長崎でザボン（謝文）という呼び名が生まれ、鹿児島では下の二字からボンタン（文旦）と呼ばれるようになったと教えられて来た。今回、『日本国語大辞典』（小学館）をみると、ザボンはポルトガル語の *jabão* に由来するとある。ザボンに限ってはこちらの方が説得力がある。ザボンの中国名は「朱欒」。どこかで見たような漢字。

ところで「ミカンは柚柑（ユカン）の訛りか」と『古事記伝』にあるらしいが、蜜のような甘さということを本居宣長ほどの学者も知らなかったようだ。文字通り蜜柑（ミツカン）から「ミカン」が生まれて来たと見てよい。子供の頃、木に登って腹いっぱい食べた島ミカンは蜜が入っていると思われるほど甘く、蜜柑（ミツカン）が語源だと体験から理解できる。他県の人々はミカンの酸っぱさは知っていても、島ミカンの甘さはほとんど知らなかっただろう。鹿児島では大抵の家の庭先にミカンの木があった。そのために「ミカン」地名は生まれにくかったのだろう。

「蜜柑・金柑・酒の爛。親は折檻、子は聞かん。御方持たせにゃ、なお聞かん、うちの親父は気が利かん。」鹿児島の家々の庭からミカンの木が消えた。あゝ気の利かん都市化？

〔鹿児島地名研究会世話役〕

植物に由来する地名

(33) 紫原

平田信芳

鹿児島市の紫原むらさきはるに一本桜とよばれる大きな桜があった。現在もあるようだが、それは二世で、風格はまだ足元にも及ばない。昭和二十三年春、七高へ入学する直前、五高へ入学する友人とのしばしの別れの想い出に紫原へ登った。花は盛りを過ぎる頃で、一本桜によじ登った二人は満身に花吹雪を浴び、桜花爛漫とはまさにこれだと語った。当時の紫原は見渡す限りの畑で、菜の花がちらほら咲いていた。時は移り、マンモス団地への変貌は革命的变化である。

さて、紫原という地名は奈良時代から江戸時代まで染料・薬用とされていた紫草に由来する。紫草と書いて「むらさき」と読むのだが、現在の人々は「むらさきそう」とご丁寧な読み方をする。紫草の根が紫根むらさきねで、染料や火傷の薬として用いていた。地名として残っているのは鹿児島市紫原、加治木町小山田紫原、吹上町永吉紫原の三か所であるが、『三国名勝図会』をみると紫草・紫根を特産とした郷を多く拾い出すことが出来る。『延喜式』も大隅国を紫草の産地の一つにあげている。

茜さす紫野行き標野行き

野守は見ずや君が袖振る(万葉集・二〇)

紫草のにはへる妹を憎くあらば

人妻ゆゑにわれ恋ひめやも(万葉集・二二)

これらの歌の舞台となったような紫草の自生地もしくは栽培地がその昔あったのだろうが、現在の南九州では見ることが出来ず、野生のものは十和田湖周辺でなければ見られないという。十数年来、紫原Ⅱ紫草由来説を唱えているが、身近に紫草を見ることがないので説得力に乏しいのか、「村崎」という地名を「紫」と書いたのではないかと混ぜ返す人もいる。村崎を紫としゃれて言ったのであれば、私は反省どころでは済まなくなる。反省だけなら猿でもするというところで有名な次郎の主人は、確か村崎太郎。

『日本地名索引』で「崎」と「むらさき」を調べてみた。「崎」地名を類別すると、①上崎・中崎・下崎・北崎・南崎・西崎・前崎・乾崎など、②神崎・宮崎・八幡崎・明神崎・権現崎など、③仏崎・寺崎・堂崎・観音崎・弁天崎・妙見崎など、④大崎・小崎・尾崎・長崎など、⑤山崎・川崎・洲崎・浜崎・岡崎・野崎・岩崎など、⑥赤崎・白崎・黒崎など、⑦柏崎・栗崎・榑崎・韭崎・藤崎・松崎など、⑧鯨崎・鶴崎・熊崎などが一般的で、村崎はただの一例。一方「むらさき」は村前・村崎が各一例で、大半が「紫」である。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(34) 女 竹

平田信芳

私の植物地名カードに「め」の項目がない。メナモミ・メヒシバ・メヒルギなどのよく知られた植物の名が辞典などにはあるが、地名とは結びついていない。「めうが」という地名は多いが、これは古い仮名づかいであり、「みょうが(茗荷)」という項で取りあげた方がよい。仕方がないので麦田・麦生田を代役として登場させ、メを出してもらおうかとも考えた。あれこれ考えているうちに、メダケという地名があったような気がして、「竹」地名のカードを当ってみた。竹の種類を示した地名もいろいろある。唐竹・金竹キンチク・駄竹ダチクはそれぞれ数も多い。真竹・女竹も少数例ながら拾い出してあった。

真竹：川内市田海・東町山門野

女竹メダケ：国分市郡田

わざわざメダケとルビまで振ってある。青葉の笛竹の産地であった国分の郡田にそういう地名があるのも不思議なめぐり合わせである。郡田の小字を確かめたが、他に「竹下」があるだけだった。「竹」地名では竹下・竹之下が最も数が多い。竹やぶ・竹林の下は地すべり・崖

くずれに強く、集落立地としては優れているということなのだろう。また崖くずれで赤い地肌が見えた場所も一年も経つと藪に覆われるものだが、崖くずれの跡地にいち早く根着くのは女竹のようでもある。その意味では女竹という地名がついた所は崩壊地形なのかもしれない。

郡田まで出かけて「女竹」という土地の地形・様子などを調べなければならぬのだが、風邪をひいてしまっただけで動けず、現地未確認のままあれこれと考えている。ただの一例という地名は比較のしようがなく、考察にてこずる。『日本地名索引』や『日本地名総覧』をみると女岳めだけ(福岡・佐賀・熊本・埼玉・島根)・雌岳めだけ(岩手・長崎)は数例あるが、女竹の例はない。女岳と男岳、雌岳と雄岳いう組合わせの地名ならば、昔の人々が考えた形状地形名として納得できる。突出した形の山が男岳、へこんだ形の山が女岳という暇な時代の人々の命名である。

『草木名彙辞典』によると女竹には女竹おんなだけ・女子竹おんなこだけ・尾長竹おながだけ・苦竹にがだけ・弱竹なよなだけ・菱竹なやだけ・皮竹かわだけ・篠竹しのべだけ・忍竹しのびだけ・秋竹あきただけ・大明竹だいみょうちく・苦真竹にがまだけ・篠しの・長間筭ながまなどの別名があるが、これらの別名をよび名とした地名も私の地名カードにはない。今回は「女竹」をとりあげてはみたが、植生地名としての可能性はうすいようである。女竹は随所で見かけるのだが。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(35) 桃木 もものき

平田信芳

わが家の梅の木にうぐいすがやって来た。花はほとんど散っているが、まだいくらか残っているので絵にはなる。うぐいすにつられて山手の方を見あげると、隣屋敷の桃の花が開き始めていた。なるほど明日は桃の節句。梅と桜はおとなびているが、桃はどことなく子供っぽくてよい。桃太郎の鬼退治や雛人形・ぼんぼり・桃の花の思い出とつながるからだろう。日本史をふりかえると桃生城・桃山文化などが出て来るが、桃生も桃山も数多い地名例ではない。京都の「桃山」は豊臣秀吉が桃の木を植えさせたことに由来する。秀吉の所行は、なんとなく子供っぽい。

『鹿児島県地名大辞典』（角川）の「小字一覧」から拾い出した「桃」地名を列挙すると次のようになる。

桃木迫（27）・桃ヶ迫（9）

桃木（3）・桃木畑（3）・桃木原（2）・桃木ヶ瀬戸

（2）・桃木山（2）・桃園（2）

桃山・桃ヶ屋敷・桃ヶ八重・桃ノ崎・桃林・桃北田・

白桃（各1）

桃木野・桃木岡・桃木ヶ丸・桃木堀・桃木田・桃木渡

瀬・桃木比良・桃木竿（各1）

総数は65例である。ということは、多く植えられなかったと理解できる。また65例中の55%が桃木迫・桃ヶ迫であり、桃の木は「迫」に植えられていたことが判る。

イザナギノミコトが死んだイザナミノミコトとの約束を守らずに怒りを買って、ヨモツシコメ（黄泉醜女）に追われて命からがら逃げ出す話が古事記・日本書紀にある。最後はヨモツヒラサカ（黄泉比良坂）の坂本で桃の実を三個手に入れ、桃の実を投げつけることよって、ようやくヨモツシコメを撃退する話である。桃太郎の話も「桃」の持つ呪術的霊力・不思議な力を示した話と考えられるが、松・竹・梅・桜ほど人里に入り込んでいない。桃・梅・桜の歌を思い出してみよう。

桃から生まれた桃太郎、気はやさしくて力持ち……。桃太郎さん桃太郎さん、お腰につけたきび団子、一つわたしにくださいな。あかりをつけましょぼんぼりに、お花をあげましょ桃の花……。桃はこのように愛嬌がある。老いたる若きもろともに、国難しのぐ冬の梅……。湯島通れば思い出す：散るや白梅玉垣に、映る二人の影法師。万朶ばんだの桜さくらか襟の色、花は吉野に嵐吹く、日本男児やまとおのこと生まれなば、散兵線の花と散れ……。これではいざや見に行かむの気にはなれない。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(36) 柳 (やなぎ)

平田 信芳

「柳の枝に飛びつく蛙」と教えられたが、ただのそら覚えで、柳について知っているのはしだれ柳・猫柳・川端柳・銀座の柳・柳行李・柳腰・柳の下のだじょう程度であり、まことにお粗末な知識である。『日本国語大辞典』(小学館)をみると、あかめやなぎ・いとやなぎ・かわやなぎ・こうりやなぎ・しばやなぎ・ふりそでやなぎ・まるばやなぎ・えのころやなぎ・ころころやなぎ・きつねやなぎ・さるやなぎ・やまねこやなぎなどがあり、妙に感心させられる。蛙と猫だけでなく、犬・猿・狐・山猫ともかわりがあるようだ。風雅な表現を求めると、『草木名彙辞典』(柏書房)に秋知草・遊草・風見草・春薄・一葉草などの別名がある。これらも柳に風と受け流して「柳」地名を眺めることにしよう。

『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小字一覧で拾うと次のようになる。柳ヶ迫(69)・柳田(56)・柳ヶ谷(41)・柳ヶ丸(37)・柳元(25)がビッグ5である。次いで柳原(18)・高柳(14)・柳ヶ平(9)となり、他は少数例となる。柳渡瀬(6)・柳(5)・柳井(4)・柳野(4)・柳ノ下(4)・小柳(4)・柳園(3)・柳口(3)・柳俣

(3)・柳町(3)・柳川(2)・柳久保(2)・柳堀(2)。以下は各1例。柳峯・柳山・柳崎・柳場・柳島・柳橋・柳沼・柳池・柳溝・柳牟田・柳ヶ水・柳ヶ森・柳嵐・柳舞・串柳・差柳・関柳・針柳・彦柳などである。

『日本地名索引』(アポック社)で全国の傾向をみると似たような結果が出て来る。柳沢(35)・柳瀬(33)・柳原(26)・柳(21)・青柳(21)・高柳(20)・柳田(17)・柳谷(17)・柳島(12)・柳川(12)・柳生(10)・大柳(10)・などが特に目立つ。これらの地名例から柳は沢・谷・迫など水分の多い所に生える樹木であることが判る。小学校四・五年の頃、「またぶり」のよい楊の枝を切って来て、まず皮を剥ぎ、ぬめり気を拭きとり、みずみずしい白木を気にいったように削って形を整える時、きめのこまかい肌ざわり握り具合に最高のよろこびを感じていた。色白の少女の手に触れるような感じだった。作りあげた遊び道具は「ゴム銃」と呼んでいた。国語辞典には「パチンコ」とある。鹿児島語では「ギッター」と云ったらしい。小石を飛ばして雀をねらうのだが、なかなか当たるものではなかった。ほとんどの者が子供の時に経験した遊びだが、雀を打ち落としたり人は少ないらしい。三匹止めた記憶があるので、ヤナギ製ゴム銃の性能がよかったのだろう。柳が芽を吹く頃になると、無心に雀をねらっていた少年時代を思い出す。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(37) 柞木

平田 信芳

イスノキ。古名はユスノキ。鹿児島では今でもユスとかユスノキという。古代語がまだ生きてる地域である。

木質が緻密で固く、昔は木刀（鹿児島語で木剣）の素材として用いられたが、現在の主なる用途はソロバン玉。大隅ソロバンの名を知っていても、ソロバン玉の原料がイスノキであることはあまり知られていない。昔も大隅半島はユスノキの産地であった。江戸時代はユス灰（ユスノキの木灰）が肥前国に送られていたらしい。十数年前、伊万里の窯元を訪ねて古伊万里のことを尋ねた。その時、薩摩からユス灰を入手する見返りに伊万里・有田の技法をひそかに伝授したという話を聞かされ、ユス灰が青磁の釉薬となることを教えられた。平安時代に秘色ひそくの青瓷せいじとしてもはやされた焼物はユスノキが大きな役割をになっていたわけだ。

『鹿児島県地名大辞典』（角川）からユスノキにかかわる地名を拾い出してみた。

柞木……川辺町田辺田

油須木……郡山町の大字

柞木原……山川町大山

柞木迫……阿久根市脇本

柞大迫……下甕村瀬々野浦

柞ノ迫……出水市上鯖洲

柞ヶ迫やいがさこ……喜入町中名

柞平……田代町麓

柞ヶ角……枕崎市東鹿籠・枕崎市別府・川辺町上山田

ユスノキ川……末吉町岩崎

壱本ユス……串木野市下名

この他に橋田いすだ（始良町下名）、橋ヶ谷（出水市武本）、橋土手（国分市向花）、橋平（始良町北山）、橋山（大根占町馬場）などがある。ただし橋田いすだ以外は読みが不確か。

ところで、伊集院の地名の由来として説かれているものにユス転訛説がある。昔はユスノキが多く生えていたユスの里だったが、ユスがいつの間にかイシユに変化し、平安時代に院（政府の倉庫）が設けられたことからイシユインと呼ばれ、さらに濁ってイジユウインになったとするものである。県内に十数例の「イスノキ」地名があるが、転訛したものは一つもない。隣接の郡山町に油須木という地名があるが、ユスの里を名乗ってはいない。伊集院だけが転訛したとしてユスの里を喧伝している。転訛説を用いたらどのようなストーリーつけられる好例ともなる。今の世はニセモノがまかり通る時代なのかもしれない。

〈鹿児島地名研究会世話役〉

植物に由来する地名

(38) 柚木

平田信芳

ユズノキによるものだが、地名や名字ではほとんどの場合、ユノキと読む。稀にユズキと読む例もある。『鹿児島地名大辞典』(角川)の「ユノキ」地名を列举すると次のようになる。

柚木谷6例(始良町船津・樋脇町塔之原・宮之城町虎居・郡山町油須木・郡山町厚地・薩摩町中津川)、柚木迫6例(鹿児島市下田・鹿屋市野里・枕崎市別府・郡山町厚地・吹上町湯之浦・吹上町和田)、柚木4例(鹿児島市吉野・福山町福山・菱刈町市山・川辺町神殿)、湯木2例(川内市西手・菱刈町荒田)、柚木田3例(福山町福山・田代町麓・東郷町斧淵。東郷町のはユズキタと読む)、柚木山2例(大隅町大谷・伊集院町竹之山)、柚木園2例(蒲生町漆・知覧町西元)、柚木平2例(福山町福山・鶴田町神子)以下は各1例。柚木渚(加世田市内山田)、柚垣塚(加世田市唐仁原)、柚木原(吉田町本名)、柚木段(大崎町野方)、柚ノ窪(末吉町深川)、柚窪前畑(末吉町深川)、柚窪渡り(末吉町深川)、柚木前迫(吹上町湯之浦)、柚木水流(郡山町郡山)

さて、「ユノキ」地名を列举してはみたが、植生地名としては多い例とも云えず、また珍しいというほどでもなく、これらをもとに論ずる程の特色は見出せない。仕方がないので一般的な話にバトンをゆずることにする。柚子は酸味が強いためにイワシやサンマの塩焼きに添えられて食卓に登場する。その香りと酸っぱさは不思議と食欲をそそる。用途はレモンに近いが、やはり和食向きである。ピフテキに柚子をしぼるのもいつか試してみたいが、コレステロール値でしぼられているとそんな実験も出来ない。以前は柚餅子とか柚味噌とかよく聞くものだった。平成の世とは云うものの世間は矢鱈と騒々しく、それにつられて女性も忙しくなり家庭でそんなものを作る器用人はいなくなった。食いたければデパートの菓子売場か食品売場で探せということだろうが、果たして探し出せるか心もとない。やがては消えて行く味覚の一つなのかもしれない。

冬至の日に柚子湯(ゆずゆ)・柚風呂(ゆぶろ・ゆずぶろ)に入れば風邪をひかなくなり、また肌もきれいになると云われていたがそのような風習も消滅してしまった。同じような風習の一つなのだが、冬至南瓜の方はまだ命脈を保っているようである。その違いは酸っぱいとあまいの差なのだろうか。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(39) 桐葉迫

平田信芳

「エ」の植生地名は少ない。荏(えごまの古名)・榎・エノキ茸がある程度だろう。えごのき・えびね・えんじゅ・えんどう、などの名を思いつくが、地名になったものはない。「えご」という地名は、(ゆ)知者木の項で述べたように県下に三十例ほどあるが、エゴノキに由来するものではない。榎は説明済みなので「エ」はあきらめて「ユズリハ」にする。

ユズリハ。楨葉または讓葉と書く。葉の筋が丸くて太い弓の弦に似ているところから弓弦葉ユヅルハと書いたものもある。若葉が生えてから古い葉が落ちるので、親から子に譲るという意味をこめて新年の飾りに用いられる。その意味では讓葉というあて字がふさわしい。

『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小字一覧には次のようなものがある。

楨ユズリハ(東郷町藤川)、楨山(西之表市伊関)、楨添(中種子町田島)、桐葉迫ユヅルハサツ(輝北町平房)、桐葉川原ユヅリハカワハラ(輝北町平房)。

『日本地名索引』および『日本地名総覧』にあたるとその地名例は多彩になる。

ユズリハ(高知)、楨(山形)、桐(広島)、讓葉(愛媛・宮崎)、杠(福岡・佐賀)、杠葉(滋賀・福岡・大分)、出灰(京都)、讓羽(山口)、弓弦羽(香川)。以下は「ゆづるは」。湯鶴羽(熊本)、出羽(大分・熊本)、論鶴羽(兵庫)、弓弦羽(京都)、弓弦葉(宮崎)など、あて字のオン・パレード。

これらのあて字は昔の人々が蘊蓄を傾けた遺産である。そのことに敬意を表すべきで、これらを正しい表記に直すことなど考えない方がよい。また文字だけでなく物の呼び名には昔の人々のいろいろな思いが込められている。ユズリハは正月の飾りに欠かせないものであり、鏡餅の大小・橙・楨葉は「親子代々譲り重ねる」の意味になる。裏白や里芋を添えるのは「子沢山こたくさん」を願っており、スルメを飾るのは「悪いことをするめー」の誓いであるなどと正月の餅飾りのたびごとに親子代々語り継がれて来た。橙は庭にあるので見たことがある。裏白(鹿児島ではヘゴという)や楨葉がどんな植生なのか、まだ見たことがない。草や木の名を憶えるのは小学生・中学生の頃なのだが、その時期を満州の曠野で過ごしたことから来る知識の欠落部分は容易に埋まらない。夕方塾へと駆り出されて行く小学生や中学生の姿を見ていると、大事な知識が埋没して行くのが予見される。受験に必要な知識・技術の方が人生の実際にはむしろ役立つものだが。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(40) 葦と葦

平田 信芳

「よし」と「あし」。「あし」と「よし」と読んでもよい。「あし」が悪しに通じるので「善し」と意図的に言い替えた呼び名である。鹿児島県内の地名から「よし・あし」の区分を眺めてみた。

① 「あし」だけのもの。

芦刈(14)、芦ヶ山(1)、芦平(1)、芦坂(1)。

② 「よし・あし」の両方があるもの。

吉原(40)・芦原(18)、吉谷(4)・芦谷(10)、吉牟田(5)・葦牟田(2)、

吉迫(4)・芦迫(1)、吉崎(3)・芦崎(1)。

③ 「よし」だけのもの。

吉田(10)、吉野(7)、吉村(5)、吉井(3)、吉ヶ字都(2)、吉畑(1)、

吉ヶ別府(1)。吉田と吉野は他県の地名例からみると、芦

田と芦野がありえるが本県では気付いていない。また、

この他に吉留・吉永・吉利・吉元・重吉・末吉・恒吉・

時吉・富吉・永吉・福吉などの地名があるが、これらは

平安時代末から鎌倉時代にかけての開発者の名が土地の

呼び名として残ったものである。主題とはやや離れた地

名であるが、これらも「吉」という佳名を意図した命名

であり、「よし・あし」を意識した命名の歴史を概略推

定する材料になり得る。

①は善し悪しを意識しなかった時代の呼び名として眺めることが出来る。葦垣に囲まれた葦葺の家。葦火をたき、葦舟に乗り葦笛を吹く。このような情景の中で、芦刈という重労働が行われた。葦の根は引いてもどこまで続くのか分からないほど長く、そのために「長」にかかる枕詞「足引の」が生まれたに違いない。裾を長く引くことから「山」にかけられるようになるのは派生的な解釈だろう。

②は「あし」を善しと言い替え始めた時代のもの。これらの中で芦谷だけが「吉」を上回る。昔は人が死ぬと芦谷に屍を持って行くのが野辺の送りであったという。その意味で「吉谷」はなじめない呼び名だったのかもしれない。原・牟田・迫・崎などは開発し利用するようになる。「よし」を願望するようになったのだろう。これらは開発が進み始めた平安時代初期以後の地名とみられる。

③は最も新しく、人々が善し悪しの縁起をことさらにかつぐ時代の命名と理解出来る。吉田・吉野・吉村・吉井・吉ヶ字都・吉畑・吉ヶ別府などは、大半が人為的開発が加わった景観と見ることが出来る。しかし「あし」を「よし」と美化する見方は、何となくこざかしい知恵が先回りしている。「よし・あし」にも日本的文化の凝縮が感じられる。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(41) 櫓木

平田信芳

語頭にラ行音が来るのが少ない日本語の中で、ラ行音で始まる植物に由来する地名を探すのは至難の技である。ない袖は振れないのたとえどおりである。

落花生・ラッキョウ、と酒の肴にはおあつらえ向きだが、こういうものが地名になることはほとんどない。ダッキュ面と茶化すことはあっても地名には付けられていない。どちらも「屁」の原料として敬遠されたのかも知れない。こういう地名の取り扱いは屁の河童とはいかない。「蘭」の付く地名はあるにはあるが少数例であり、地名考察の対象にはなり得ない。①蘭平らんぺい（栗野町稲葉崎）、②蘭下らんのした（栗野町稲葉崎）、③奇蘭迫（根占町山本）、④蘭当（知名町下城）、⑤東小蘭・西小蘭（徳之島町花徳）。こんなものもありますまといふだけのこと。盆栽好きな人たちは蘭のある場所を知っていても秘密にしたがる傾向が強く、「蘭」地名は一般化しなかったであろう。蘭・万年青には関心がないので、その辺のことはよくは知らん。

竜眼・竜舌蘭・リンゴ・りんどうなどは、結構身近に

あるものだが、地名となると縁がない。

「ル」は、ると述べようにも植物名さえ思い出せない。

レイシ・レンゲ・蓮根、と思いつくが、これとても蓮花谷ヶ平（れんげだにがひら）という地名が金峰町大坂に一例あるだけ。春先にはどこの田圃でもレンゲの花が見られるが、どこにでもあるものは逆に云えば地名にはなり得ないことを示している。

「ロ」に至ってはロレッツさえも回らない。

窮余の一策で、「櫓」の素材に因む「櫓」地名をあげることにする。

櫓木うぎ（出水市上鯖洲）・櫓木ノ段（東郷町鳥丸）・櫓山（鹿児島市五ヶ別府・牧園町三体堂）・路山（喜入町前之浜）・櫓山平（鹿児島市五ヶ別府）など、県下に七例ほど「櫓」地名がある。和船の「櫓」の原材料を出した所に、櫓木とか櫓山とかいう地名がついたのであろう。伝馬船を漕ぐ姿など全く過去の話となり、「櫓」もどのようにして作られたのか、すべて忘却の彼方の存在となった。村の渡しの船頭さんは、今年六十のお爺さん……は童謡の歌詞。いい情景である。ところで、子曰く「六十にして耳順う」と。耳順を超えたけれども娑婆気がぬけない。植生地名は色っぽい六本木・六本松の方が適していたようだ。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(42) 蕨野迫

平田信芳

蕨を混ぜて炊いた蕨飯、蕨を味噌汁の実とした蕨汁、蕨の浸し・漬物など、しゃきっとした歯ごたえを感じる一方で、あっさりした甘さと淡い渋みを感じる舌ざわりは、いわゆる山菜の味である。蕨餅。耳学問でそんなものがあるということは知っているが、実際に口にしたこととはない。二十年ほど前、遺跡の分布調査に出かけて、たまたま蕨がわんさと生えている場所に出会い、短時間で結構食べるだけは取ってきたことがある。これなどは偶然の蕨取で、わざわざ春の野に生活の楽しみを求めて出かける蕨狩・蕨摘と呼べるものではないが、持ち帰って食べる量を自分の手で取れたことはやはり楽しかった。次にあげるのは蕨の植生に由来する県内の地名である。これらの中にはまだ蕨摘が出来る場所があるかも知れない。

蕨迫（川内市西手・蒲生町漆・蒲生町西浦・栗野町米永・大浦町大浦・大根占町神川・東市来町養母・東市来町長里）、蕨野迫（川内市麓）

蕨野（鹿屋市下高隈・川内市西手・川内市寄田・薩摩

町求名・松山町新橋・吹上町永吉・大浦町大浦）

蕨窪（指宿市東方・加世田市川畑・郡山町厚地）

蕨田代（西之表市西之表・西之表市住吉・南種子町島間）

蕨ノ原（加世田市川畑・川内市麓）

以下は各一例。蕨（西之表市現和）、黒蕨（阿久根市多田）、野蕨（南種子町中之下）、蕨川内（薩摩町求名）、蕨谷（大隅町中之内）、蕨ヶ入佐（末吉町深川）、蕨ヶ平（南種子町平山）、蕨ノ打跡（西之表市現和）

これらの中で注目を引くのが川内市麓（高城麓のこと）の蕨野原と蕨野迫、郡山町厚地の蕨ノ久保。わざわざ方言表記で「わらべ」とルビが振ってある。

『日本国語大事典』（小学館）には故事付けらしい蕨の語源説が四つ、五つあげてあるが、その中で「童手振（わらわてふり）の義か」「形が藁火（わらび）に似ている」との二つの説が注目を引く。鹿児島語の蕨（わらべ）は童（わらべ）にも通じるものを感じさせる。子供のにぎりこぶしのように曲っているのが蕨で、童たちが親の手助けの意味で摘んで来て食用に供したのであろう。童↓わらわべ↓わらんべ↓わらべ、と変化したと国語辞典は説明するが、「わらべ」から「わらび」への変化については納得できる解釈にまだ出会っていない

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(43) 海辺ノ木

平田 信芳

俳句の素養のある人は郁子をイッコと読むことはまずないだろう。秋の季語として巧みに利用することを考えるに違いない。俳句にうとい私はこの項を執筆するため『日本国語大事典』（小学館）に当たってみて、はじめて郁子（うべ・むべ）と読むことを知った。幼なじみに郁子という女の子がいたので、それが先入観となってイッコだけを考えていた。

県内の小字で「うんべ」にちなむものは、海辺ノ木（大浦町大浦）・ムンベ山（串良町有里）・ウベ山（宮之城町虎居）・宇部山（末吉町岩崎）の四例しかない。四例を比較して、海辺ノ木が「うんべの木」に由来する植生地名であることが分かる。

国語辞典によると「むべ」が古く、「うべ」「うんべ」はその変化形らしい。むべ↓うべ↓うむべ↓うんべ、の順に変化したとみなされる。県内で見える地名では「むべ」はなく、「うべ」または「うんべ」である。

『日本地名索引』（アポック社）で全国の例を見ると、「むべ」地名はムベ島（長崎）・宜山（広島）の二例だが、「うべ」地名は宇部（岩手・千葉・山口）、鳥辺島

（福井）、宇倍（鳥取）、鶉部ノ鼻（香川）など用例が多い。例の少ない「むべ」が古く、数の多い「うべ」が新しいとみなしてよい。なお、『和名抄』の訓は「郁子、和名牟閉」である。

『延喜式』によると、平安時代においては郁子^{むべ}は近江国から献上される菓子として知られていたらしい。平安貴族たちは郁子の甘さに目を細めていたに違いない。しかし、最近では山に「うんべちぎり」に出かけることなどなくなった。ときたま山で見かけても、鳥に食い荒らされた残りがあただけである。郁子には抗がん作用があるとかエイズに効果があるなどとなると皆は目の色を変えるのだろうか、口のおごった日本人には縁のない果物となった。うんべーと思うに違いないのだが。

「むべ」から「うべ」に変化したことを基本として考えると、手向（たむけ）から峠（たうげ）が生じたとする語源説や日向（ひむか）から「ひうが」に転化したとする音便説に長い疑問を感じていたが、「む」から「う」の変化の着想もあり得ると認めざるを得なくなった。無（む）から有（う）を生じさせる哲学、有無相通じるとみる哲学は、鎌倉末から室町時代にかけての禅僧たちが好んだ発想だったのかも知れない。なお宇部を「ウミ（海）・べ（辺）の約」「ウメ（梅）の転か」などと考えるのが従来の地名解釈である。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(44) 蒲生

平田 信芳

蒲生、これは鹿児島で育った者からみると地名・名字ともに「かもう」である。一方、安土桃山時代の武将は蒲生氏郷（がもうじさと）。小さい時、蒲生氏郷の方を先に知ったので、「かもう」という地名・名字に慣れるまで時間がかかった。一般的に鹿児島語は清音・濁音ともにその発音が標準語と逆の場合が多い。例えば神社を「じんしゃ」というが、こちらの方が日本語では古い発音になる。社を「じゃ」と読む例は神社と総社しかないので、総社が歴史の上で登場する鎌倉時代以降の発音と見当がつく。蒲生の場合も神社と同様に、清音が時代的には古く、濁音が新しいと推定できる。

『日本地名総覧』（角川）をもとに「かもう・がもう」の類例を拾ってみた。

蒲生（かもう）……山形県南陽市蒲生田、新潟県東頸城郡松代町蒲生、香川県小豆郡池田町蒲生、福岡県北九州市小倉南区蒲生、福岡県柳川市蒲生、熊本県山鹿市蒲生、鹿児島県始良郡蒲生町。

蒲生（がもう）……宮城県仙台市蒲生、福島県南会津

郡只見村蒲生、栃木県宇都宮市蒲生町、埼玉県越谷市蒲生、福井県丹生郡越廼村蒲生、滋賀県蒲生郡蒲生町、大阪府城東区蒲生町、徳島県阿南市蒲生田岬、兵庫県美方郡温泉町蒲生峠、鳥取県岩美郡岩美町蒲生。

次に蒲（がま）とよむ例は蒲池（新潟）・蒲郡（愛知）・蒲沢（福井）・蒲田（青森・愛知・岐阜）・蒲野沢（青森）・蒲原（新潟・愛知）と少なく、むしろ蒲（かま）と読む地名の方が多く全国に散在している。蒲菊（秋田）・蒲ヶ山（茨城）・蒲田（秋田・東京・兵庫・福岡）・蒲島（大阪）・蒲刈（広島）・蒲野（香川）・蒲池（福岡）・蒲原（福岡）・蒲川山（佐賀）・蒲田江（佐賀）・蒲牟田（宮崎）などである。

「かもう・かま」は主として九州にみられ、「がもう・がま」は近畿、中部地方に多く見られる。因幡の白兔が蒲の穂わたにくるまった話や蒲生氏郷・滋賀県蒲生郡・愛知県蒲郡などがよく知られているために、「がま・がもう」の読みの方が正しいと錯覚しているにすぎない。県内の類例地名を拾うと蒲牟田（鹿児島市上福元・川内市楠元・垂水市高城・始良町寺師）、釜牟田（枕崎市西鹿籠・喜入町生見）・竈牟田（川内市東手）がある。これらの他に釜ヶ迫・鎌ヶ迫の類似地名があるが、これらも「蒲ヶ迫」と考えた方がよさそうである。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(45) 銀杏迫

平田信芳

銀杏。これを「いちちょう」と読むこともあるが、「ぎんなん」と読むのが普通である。「ぎんなん」という場合には、いちちょうの実を意味することが多い。会席料理に出て来る茶碗蒸しの中にぎんなんがいくつか入っていたり、小皿の上に松葉で突き抜いたつまみとして出て来たりするがあまり美味とは思わない。火鉢の灰の中に埋め、ポンとはじけた熱いエメラルドグリーンの実をふーふー吹きながら食べた少年時代の味の方が勝っている。

ところで杏林製菓とか杏林大学というものがあることを考えると「ぎんきょう」と読みそうなものだが、そんな読みはない。なぜ「ぎんなん」と読むのか。今案ずるに杏子はアンズのこと。中国語風に読むと、銀(イン)杏(アン)。それが日本語化して折衷語「ギンアン」が生まれ、その連音が「ギンナン」ということになるのだろう。

いちちょうの木には雄・雌があり、雌木だけにしか実はない。また雌木だけでも近くに雄の木がなければ実はない。実がなるためには雄・雌の木が必要だと中学時代に教えられた。それが性教育の一つだったのだろ

うが、その頃はまだぴんと来なかった。私が学んだ学校、教師となってから勤務した学校はみな歴史の古い学校で、校庭の片隅に大きな銀杏の木が数本あった。十月、台風一過の後にはたくさんの銀杏の実が散乱していた。庭掃除の生徒たちが竹ボウキで掃き集めるが、実を踏みつぶすと独特の臭気に悩まされるので掃き寄せるだけで終わっていた。掃き集められた実はいつの間にか誰かに持ち去られていたが、誰が持ち去るのか詮索することもなかった。銀杏の実を袋に入れたまま小川で踏みつぶし、ゴム手袋で洗い流しながら種子を集めると簡単だと聞いて、いつか試してみようと思っていたが実行の機会はなかった。

神社や寺院の境内で大きな銀杏の木をよく見かける。県内では福山町宮浦神社の夫婦イチョウが有名で、樹齡は千年をこすといわれる。よく見かけるためだろうか、「銀杏」地名は意外と少ない。地名カードを見てあまりの少なさに拍子抜けした。県内の小字では次の2例だけである。

鴨脚ノ木迫イチョノキサカ―鹿児島市坂元
銀杏迫ギンナギ―喜入町前之浜

「いちちょう」の語源は中国で学んだ禅僧たちが鴨脚イチョの宋音ソウオンヤーチャオをイーチャオと憶え、それがイチョウに訛ったという。数少ない2例にイチョウ・ギンナンが含まれていた。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(46) 久見崎

平田信芳

軍ケ尾(福山町福山)、軍原(川内市五代)・軍ケ迫^{グンケサコ}(始良町寺師・喜入町中名)・軍ノ木(末吉町岩崎)・軍之木迫(横川町中ノ)・軍野ケ迫^{グンノキガサコ}(喜入町中名)・軍木ケ迫^{グンノキガサコ}(知覧町西元)・軍木ケ平^{グンノキガサコ}(大口市曾木)など、「軍」のつく地名にときたま出合う。地名に慣れない人は、その昔、戦場になった所だと考えたりする。これらは「グミノキ」の植生地名が変化したにすぎない。昔は子供たちが喜んで食べていたグミの実も、今ではときたま生け花の材料に使われる程度の存在になっている。小鳥たちは人間に気がねすることなく思いのまま、についばめるようになったとみてもよい。

「鹿児島県地名大辞典」(角川)の小字一覧にみえるものを類別すると、グミ・ギミノ木(14例)・久見(12例)・軍之木(8例)・茱萸(6例)・組(3例)・汲(2例)・具味ノ木(1例)の47例になる。その中で最も多いのは久見迫・茱萸木迫・軍之木迫・グミノ木迫・組ケ迫などで、「迫」に結びつく地名が21例ある。

確実に「クミ」と読むものは、久見(鹿児島市小野)・

久見木迫(鹿児島市田上)・クミ迫(始良町西餅田)・久見瀬(市来町川上)の4例である。清音のよみは少数で、大多数は「グミ」という濁音である。「クミ」という少数例が存在することは、清音が古い時代および名であつたことを想定できる。

川内市高江の「久見崎」は「グミザキ」と読む。その昔、久見崎の浜辺にはグミが多く自生していたという。グミの植生による地名だと理解してよい。また久見崎は『文徳実録』仁寿三年(八五三)七月丙辰(廿七日)の条に記事がみえるので、史書にみえる県内の地名例では古い方である。全文を引用をしよう。「賜薩摩国孝女挹前福依売爵三級、復終其身旌表門閭。福依売天性至孝、父母皆八十、老病著床。無子、唯有一女。福依売扶持左右、嘗藥二十余年、傭力致養。晝夕辛勤、容顔焦瘦。觀者憐之。福依売雖云野族、閑於礼儀、恭敬父母。有所諮稟、必正色作声、未曾褻情」

挹前は「クミサキ」、福依売は「フクヨメ」または「サチヨリメ」と読む。平安時代の初めに孝行娘とのことで表彰され、爵三級(三級の爵位)を賜わったと県史・郷土史などで紹介されて来た。しかし古代隼人が「野族」と表現されていることは知らされていない。「野族」の表現を味わうと、グミの実のしぶさが口の中に残っているような感じになる。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(47) 胡麻ヶ迫

平田 信芳

現証拠（げんのしょうこ）というよく効く有名な薬草がある。堤防や線路の土手にいっぱい生えていて、子供の頃母に連れられて採りに行ったこともある。しかし、よく見られるためだろう。それが地名に用いられることはない。オリンピックの勝者には月桂樹の冠が与えられるが、日本では酒の銘柄でしかない。「げ」はあきらめて「ご」に移る。

「五葉松」があるが、庭木や盆栽で愛玩されたものであるから、これは地名にはなり得ない。「ごぼう」。きんぴら・てんぷら・うま煮など、よく食卓に登場するが、これも地名としては見かけない。仕方がないから胡麻でごまかすことにする。胡麻の灰は歴史の彼方へ消えたが、ごま塩頭・ごますりは相も変わらず現役の表現である。また、しぼるほどよく取れると云われた胡麻油もラーメンの味付けで巾を利かせているようだ。以下は『鹿児島県地名大辞典』（角川）から拾い出した「ゴマ」地名である。ごまんとはないが、若干はある。まあごまめの歯ぎしり程度。

胡麻ヶ迫・胡磨ヶ迫・胡摩ヶ迫など：

垂水市田神・国分市上之段・枕崎市西鹿籠・牧園町宿窪田・祁答院町上手・樋脇町市比野・東市来町養母（どうしたことか「市」という自治体は胡磨・胡摩の字を当てている。「町」はすべて胡麻を用いている）。

胡麻田：鹿児島市小野・串木野市下名・出水市上鯖淵・末吉町南之郷・東市来町養母（出水市だけが胡磨と表記）。
胡麻堀：加世田市宮原・串木野市下名。胡麻（吹上町湯之浦）。胡摩（大崎町仮宿）。胡麻畑（東市来町養母）・胡麻島（下甕村手打）。胡麻付（指宿市西方）・胡摩付（指宿市東方）。胡摩平（鹿児島市下福元）。胡麻園（大崎町菱田）。胡摩窪（末吉町諏訪方）。

これらの中には直言密教の「護摩」にもとづく地名もあると考えられる。胡麻ヶ迫・胡麻島などは植生地名だろうが、その他の当て字の場合は植生地名と信仰地名の区別は付けにくい。護摩野（薩摩町永野）、護摩所（伊集院町竹之山）、胡麻ノ段（串木野市冠岳）、胡摩石（鹿児島市中）などは信仰に由来する地名とみてよいだろう。また、付近に真言宗の寺院の跡があれば、寺・堂などの寺院にかかわる地名が近辺に残っている可能性の方が大きい。そのような場合の「胡麻」は「護摩」の当て字であるとみて差し支えない。胡麻・護摩の区別は細々しく、まごまごさせられる。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(48) 大根 畠 平田信芳

石榴(ざくろ)・朱欒(ざぼん)・じゃが芋・じゆずだま、とザ行の植物を思い浮かべてはみるが、私の地名カードには残念ながらない。わずかに「ぜんまい」らしいものが4例あるだけ。①薇野(根占町別府)・②薇ノ平(中種子町納官)・③薇ノ平(中種子町野間)・④センマイ(伊集院町寺脇)。①・②・③はルビもなく、未だに問い合わせもしていない。④も千枚なのか薇なのか未確認。②・③も薇でなくて薇となつてゐる。「薇」は前号の山下先生の解釈に頼ることにする。

ダ行の地名も大根(3)・大豆(3)・橙木(5)・駄竹(19)がある程度。駄竹・ダチク・ダ竹・脱竹・雑竹・太竹・田竹・陀竹と当て字が種々雑多。「ダタケ」とルビを振つたものも2例ほどある。当て字はあり得ることなので目くじらを立てる必要もないが、ダタケだけは頂けない。地籍台帳・字絵図などに記された小字が読めなくなると、担当者が便宜上適当にルビを振つておいたものが地名大辞典の刊行などによつて結果的にそのままの形で日の目を見る形になるわけである。具体例を一つあげる。「大角

豆迫」という地名が県内に4例ほどある。2例はルビを振つてない。ルビが振つてゐるのは「ササゲンサコ」と「ダイカクマメザコ」。ダイカクマメザコで世の中を渡つていけるのだから、ものごとをことさらに難しく考える必要はないのかも知れないが。

大根下(ダイコンシタ)・大根畠(オオネバテ)・大根田(ルビなし)なども考えさせられる。これらは「オオネ」と読むのが正しいのだろう。大根の山地は昔ならば練馬。鹿兒島では桜島。現在では山川町が適当かも知れない。山川漬用の大根畠が続いている。

ところで大根畠の側を通ると、いつも考えさせられることがあつた。「大根畠でこなだけでげんね事しやんな。人が見ちよんど、オハラハ一笑れもんど。ハ、ヨイヨイヨイヤサ」。若い男女が抱き合うには周囲から丸見え。女の立ち小使などは昔の農作業では当然すぎることに。大根畠でするげんね事(恥ずかしい事)とは何か、と。

たまたまダ行の地名のために「大根」を辞典類で引いてみて、大根畠とは宝暦の頃(一八世紀中頃)から江戸本郷湯島に出現した岡場所を指したものであることを知つた。参勤交代のお供で花のお江戸に出た薩摩の武士たちが遊びに出かけて羽目はずしたとみられる。大根畠をデコンバタケと表現して酒のサカナにしたのがその始まりだったとみてよい。

(鹿兒島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(49) 芭蕉 平田信芳

鹿児島県では「松尾」という地名があちこちにみられる。その数は約百例。また三十例ばかりだが、「芭蕉」という地名もある。これらに気付いてのことだろう。松尾芭蕉が鹿児島に来たことがあるのだろうか、と首をかしげる人にときたま出合う。松尾は松岡の古形で「松尾十地名語尾(か)」と理解してよい。松岡という地名は県内に三例あるだけで、ほとんどが松尾である。また、松尾の地名は多いが、松尾神社の名は聞かない。京都の「松尾神社」を勧請したものでなく、地形名称としての松尾(松の岡)と理解してよい。

次に芭蕉および類似音の地名を『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小字一覧から拾い出してみた。

芭蕉(伊仙町伊仙・伊仙町前縄・出水市上鯖淵・出水市大川内・川内市城上・根占町川北・松元町上谷口)、芭蕉迫(知名町住吉・出水市武本・串良町細山田・財部町南俣・松元町四元)、芭蕉田(国分市台明寺・東郷町藤川)、場集田(霧島町川北)、番城田(高尾野町上水流)、番匠田(長島町城川内)、馬上田(川辺町本別府)、芭蕉

俣(知名町住吉・和泊町国頭)、芭蕉山(上屋久町一湊・薩摩町永野)、場所ノ谷(知覧町永里)、番城ヶ谷(財部町北俣)、芭蕉ヶ宇都(吉田町東佐多浦)、場シガ宇都(南種子町平山)、芭蕉浦崎(上屋久町口永良部)、芭蕉作(笠利町喜瀬)、芭蕉ソ(与論町那間)、芭蕉棚(知名町田皆)、芭蕉畑(中種子町坂井)、芭蕉堀(吹上町小野)、芭蕉増(伊仙町古里)、芭蕉本(輝北町上百引)、馬上坂(国分市川原)、馬上ノ下(垂水市市木)、盤匠(中種子町野間)、婆女鼻(西之表市西之表)などがある。

奄美諸島・屋久島・種子島などにみられる二三例ほどの「芭蕉」地名はすなおに植生地名と受け取めることができる。しかし、その他は別の要素を考える必要がある。「芭蕉」地名については、番所から転化したものとする説、中世に租税免除の土地であった「馬上免」に由来するとの説などがあるが、地名例の最後にあげた「婆女鼻」は大きなヒントになる。これは「婆女が住んでいる岬(崎)」の意味になる。非常に険しい所で、俗人の立ち入りはちよつと考えられない。そのような所に恐ろしい山姥(やまうば)・蓑婆尉(みのばじょう)が住んでいると人々は考えた。ささくれた芭蕉の葉は気味悪い山姥の衣装にふさわしい。婆尉↓婆女↓馬上↓芭蕉と姿を変えたのであろう。

(鹿児島県地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(50) 枇杷と琵琶

平田 信芳

檳榔と枇杷がビ音の代表的植生地名である。檳榔はいかにも南国的な地名であるが、類例が少ない。志布志町と佐多町の沖合いにそれぞれ枇杷島が浮かんでいる。どちらとも遠くから眺めただけで渡つたことはない。地名カードには佐多町の枇杷ヶ尾・枇杷首・枇杷ヶ谷という小字が記されているが、少数で地域的に限られている。平安時代、上皇・親王・摂政関白などが用いた牛車は檳榔の葉で車体が覆われていたと聞かされてきたが、その産地である日向国・大隅国との関わりは説明されていない。史料的に知られていないので歴史家が関心を持たなかったとみられる。貴族たちが何故檳榔の車を用いたのかという点に興味をもつが、その由来についての手がかりはない。

鹿児島で枇杷と云えば、桜島の枇杷島を連想するが、三十年ばかり続いている降灰で縁遠い存在となった。枇杷の味覚は傍らに置くことにして、『鹿児島県地名大辞典』（角川）の小字一覧から「枇杷・琵琶」地名を拾い出すことにする。（カッコ内の数は類例数を示す）。

枇杷首(6)……琵琶首(7)（びわのくび）

枇杷甲(3)……琵琶甲(7)（びわのこう）

枇杷谷(2)……琵琶谷(3)（びわのたに）

枇杷野(2)……琵琶野(2)

枇杷迫(1)……琵琶迫(2)（びわのさこ）

枇杷ヶ丸(1)……琵琶ヶ丸(1)

枇杷田(1)……琵琶田(1)

以下のものはどちらかに片寄る。琵琶(5)、枇杷木(1)、枇杷山(1)、枇杷ヶ尾(1)、枇杷石(1)、琵琶崎(1)、琵琶原(1)などである。

枇杷・琵琶の用字の区別は任意的であり、区別しにくい。枇杷谷（琵琶谷）・枇杷野（琵琶野）・枇杷迫（琵琶迫）・枇杷田（琵琶田）・枇杷木・枇杷山・枇杷ヶ尾・琵琶崎・琵琶原などは枇杷の植生地名とみられる。琵琶・枇杷石・枇杷ヶ丸（琵琶ヶ丸）は解釈困難。枇杷首（琵琶首）・枇杷甲（琵琶甲）は琵琶の形状を連想しての命名と考えられる。

「長恨歌」で知られる楊貴妃は、琵琶をビワン・ビワシと瓜引いたことよって音楽好きの玄宗皇帝の寵愛を受けるようになったと話すと、生徒たちはダジャレと思つて吹き出すのが常であった。琵琶という名称はビワンという擬音に始まるものであり、枇杷の葉および果実が琵琶に形が似ていることからその名が付いたことを考えると、枇杷・琵琶という地名表記の混同は当然すぎることもある。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(51) 正ヶ迫

平田 信芳

アイウエオ順ではバ・ビ・ブと続くのだが、地名カードには葡萄迫（吹上町永吉）が一例あるだけ。野ぶどうはよく見かけるが地名にはなっていない。次のべも紅園（国分市福島）が一例あるだけ。木瓜の家紋は多いが地名は気付かない。菩提樹はシューベルトの曲。立てばしゃくやく坐ればと云われる牡丹も地名にない。文旦も飴・砂糖漬・リキュールにはなっているが地名になりえない。濁音地名を打ち切って拗音地名に移ることにする。しかし、これも数が少ない。

伽羅の香などは文字の上だけの知識。胡瓜は野菜畑で見かけるが、地名となるほど栽培されていない。夾竹桃は鹿児島市内の公園でよく見かけるが、生け垣として使われているだけのこと。近い用例で桔梗があるが、木京ヶ段（宮之城舟木）と桔梗ヶ尾（末吉町深川）の二例だけ。秋の七草も葛・萩・ススキ（尾花）以外は地名になじまないようである。

棕櫚は南国的な植物なので地名例が多いのではと思うが、棕櫚木元（串木野市下名）・棕櫚段（国分市上之段）の二例だけ。菖蒲と茶の付く地名は多いので次回にとり

あげる。今回はしょうがないので生姜に登場してもらおうことにする。

正ヶ迫（薩摩町求名・大隅町大谷）

菖ヶ迫（宮之城町平川）

正ヶ峯（財部町南俣・財部町下財部）

正賀牟田（大口市白木）

正ヶ谷（末吉町深川）

正ヶ久保（中種子町納官）

『鹿児島県地名大辞典』（角川）の「小字一覽」には上記八例の地名例がある。ルビのないものは読みを確かめていないが、恐らく「しょうが」と読むものとみられる。「生姜（しょうが）」と記したものは一例もないが生姜に由来した地名と考えたい。古代末から中世にかけて多く成立する庄園にかかわる地名と仮定して庄ヶ迫・庄ヶ峯・庄ヶ牟田・庄ヶ谷・庄ヶ久保と書き並べてみるが、庄にかかわる迫・峯・牟田・谷・久保と力むほど生産性の高い地名と解釈することはできないからである。

生姜の砂糖漬は菓子としても風味があるし、熱湯を注いで飲むと風邪にも利くようだ。にぎりずしの口直しに生姜は欠かせないし、ちらしずしに色どりを添えるのは紅生姜である。これらを考えると「生姜」地名があつて当然と思う。ただ気になるのは正之迫（金峰町浦之名）という地名。これは後日の課題とする。

（鹿児島地名研究会世話役）

植物に由来する地名

(52) 勝負谷と菖蒲谷 平田 信芳

その昔、敵・味方の大将がここで勝負を決めるために戦った古戦場であることから勝負谷となったのではとよく問いかげられる。この菖蒲谷には菖蒲など生えていないので、古戦場を考えた方がよくはないか、と。『地名語源辞典』『地名用語語源辞典』『日本地名ルーツ辞典』なども、水のわき出る清水シヨウスイと同じとか、シヨウズからシヨウブに変化したもので植生地名ではないと考えられる、などと解説しているから始末に困る。

『鹿児島県地名大辞典』（角川）の「小字一覧」に九〇例の「菖蒲」地名がある。そのうちの60%が菖蒲谷（20例）・菖蒲迫（18例）・菖蒲田（16例）になる。谷・迫・田という湿地を示す地名から「菖蒲」の植生をまず想定できる。

つぎに、九〇例のうち、勝負谷（阿久根市大川・枕崎市東鹿籠・喜入町前之浜）、正部谷（財部町下財部）、正部田（穎娃町郡）、正牟田（横川町上ノ・祁答院町上手・川辺町中山田）、小正部（財部町北俣）の九例がいわゆ

る当て字とみられる表記であり、残る八一例すなわち90%が「菖蒲」という表記を用いている。90%の地名表記を単なる当て字と解釈すること自体、地名研究者自身が地名研究をいたずらに複雑なものにしていることを示す。

菖蒲谷（鹿児島市皆与志・鹿児島市下伊敷・鹿児島市五ヶ別府・加世田市唐仁原・鹿屋市天神町・牧園町万膳・喜入町中名・笠沙町赤生木・川辺町上山田・知覧町郡・大隅町岩川・大隅町中之内・輝北町平房・金峰町浦之名・吹上町永吉・吹上町和田）

菖蒲迫（鹿児島市伊敷・出水市武本・大口市針持・鹿屋市池園町・国分市上井・垂水市牛根麓・始良町上名・始良町下名・始良町大山・大根占町城元・田代町川原・根占町別府・鶴田町鶴田・樋脇町塔之原・宮之城町虎居・伊集院町飯牟礼・吹上町田尻・吹上町湯之浦）

菖蒲田（指宿市新西方・鹿屋市高須町・鹿屋市野里・垂水市田神・福山町福山・蒲生町米丸・吉田町本名・中種子町野間・中種子町油久・宮之城町広瀬・有明町伊崎田・大隅町月野）

これらの中には現在でも「菖蒲」の植生が見られるところがあると考える。それがサトイモ科の菖蒲であるのか、アヤメ科のハナシヨウブであるのか、現場を見ていないので明言はできない。ところで、端午の節句に菖蒲湯に入る風習も風前の灯火同様になったようだ。

〈鹿児島地名研究会世話役〉

植物に由来する地名

(53) 茶園ヶ迫

平田信芳

最近、緑茶・紅茶・ウーロン茶の他に、ミルクティー・レモンティー・ジャバティー等々、自動販売機の中身が多彩になった。なまぬるい水道の水に比べると、夏は冷たく冬は暖かいためつい手が出ている。自宅では書斎に専用の湯わかしポットを置いてあるが、電気ポットの湯は紅茶が適しているようだ。減量を至上命令とされている立場上、菓子・ケーキの類に手が出せず、同時に茶・コーヒーとも遠ざかる形になっている。紅茶も減量のため砂糖とは絶縁状態。減量という大義名分によって侘しい嗜好生活を強いられている。お茶をひく気持とはこんなものだったのたろうか。酒も絶ち、タバコもやめているのに、何故とばかりも始まらない。ごたくを並べてお茶を濁してもならないので本題にかえる。

私の地名カードには、県内に茶屋43例・茶円30例・茶園29例・茶木11例・茶筧2例がある。「茶屋」地名を地図上に記していけば近世の交通路を考えることが出来るので、地名研究の立場からは「茶屋」に最も魅力を感じる。しかし「茶屋」は、交通地名であって植生地名ではない。同様に「茶筧」も形状が類似しているだけのこと。

茶円・茶園・茶木だけが茶の植生地名となるが、茶円は茶園のあて字にすぎない。

地名カードの「茶」地名を眺めると、茶園・茶木の終止形となるものも多いが、そのうしろに迫・尾・平・段・山・久保などの地形名が付くという共通項を見出せる。茶円迫・茶園ヶ尾・茶木平という形である。それらを整理すると迫(18)・尾(9)・平(5)・段(4)・山(1)・久保(1)となる。迫・尾・平・段はシラス地形の各種の形態である。迫は浸食されたシラス台地の合間に長く続く低地、尾は小高い丘、平は緩傾斜面、段はシラス台地の縁辺部、久保は凹地のこと。これらを見ると、最初は迫とか尾とよばれる地形のところには茶園が作られたことが判る。地名例は茶園迫(12)・茶円迫(6)が最も多い。見渡す限りの原に茶畑が続くようになるのは最近のこと。

以上は商品作物としての栽培であるが、鹿児島県の農家では屋敷の周囲や畑の境界に茶の木を植え、自家消費用のものとしている。境界を示す茶の木の並びを「土手茶」ということを溝辺台地の縦貫道発掘調査で教えられた。トラクターやトレンチャーなどの大型耕作機械で深掘りされ、地下の遺構・遺物などが破壊されても、土手茶の跡からは完全な土器が出てきたりするものだった。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(54) 瓢箪山

平田 信芳

植物地名シリーズの残りカードは二枚、瓢箪と茗荷を予定していた。原稿の期日が迫って来たので「瓢箪」の地名カードを出してみた。見て、びっくり。後の祭。植生地名か？と解釈できるのは、ただの一例。他はすべて形状地名。「鹿児島県地名大事典」(角川)の「小字一覽」にみえる地名例も、次の六例がすべてである。

- ① 瓢単野……………霧島町永水
- ② 瓢単ヶ尾……………喜入町中名
- ③ 瓢箪山・瓢箪山迫……………知覧町郡
- ④ 瓢山……………知覧町永里
- ⑤ 瓢単山……………大根占町馬場
- ⑥ 瓢箪岳……………下甕町手打

方針を変えて「丁子」をと、地名カードをめくった。しかし、丁字平(宮之城町田原)・丁字ヶ山(中種子町油久)の二例だけ。これではどうにもならない。世界史上、香料群島の別名で知られるモルッカ諸島原産の木がこちらに持込まれて栽培されているのかも確かめない。また、丁子の木・果実の現物を見たこともない。さらに恥ずかしいことだが、「丁子紋」という家紋を最近

知った。墓地めぐりをしながら、矢鱈に大根あるいは人参を文様化したものがあるなと思った。紋章の本を引き出して、それが「丁子紋」であることを知った。こんな調子だから丁子を扱うのは無理な話。

「瓢箪塚」や「ひさご塚」が前方後円墳を指す呼び名であるのは考古学的には知られたことだが、前記の「瓢箪」地名についてそれを確かめてはいない。もし該当するものが出て来たら、それこそ「ひょうたんから駒」の類になる。アフリカ原産の「瓢箪」がこちらで地名になるほど栽培されてはいない。地名に付けられる場合も形状類似の取扱いである。ひょうたん鯰・ひょうたんの川流れのように把えどころがないと云ってよい。

『草木名彙辞典』の「へうたん」を引いて、漢名が葫蘆・葫蘆とあるのを見て驚いた。昭和二十一年、引揚船に乗った葫蘆島の地名の意味が判ったからである。港の沖合にあったひょうたん形の島、それが葫蘆島だったのだ。昭和十九年初夏のある土曜日、保証人宅に下宿していた中学二年生は、保証人に連れられて葫蘆島港の岸壁に夜釣りに出かけた。生まれて初めての徹夜経験だった。メバルが面白いように釣れた。最大の釣果は五〇センチほどのスズキ。その手ごたえは遠くに眺めたひょうたん形の島影と共に今でも憶えている。

(鹿児島地名研究会世話役)

植物に由来する地名

(55) 明ヶ谷 平田 信芳

母の実家の家紋が抱茗荷(だきみようが)だったので、小さい時から茗荷には関心があった。吸物、酢味噌などの茗荷の料理を味わうたびに、なぜ「茗荷を食うと馬鹿になる」「茗荷を食うと物忘れする」のかが理解できなかった。茗荷を食べても馬鹿にもなれなかったし、物忘れもしない人生だった。嫌なことなど忘れて馬鹿のように熱中できる人生は幸福だとも考える。

茗荷が自生している所や栽培されている所を未だ見たことがないとつぶやくと、わが家の女房殿、庭に植えてあるという。そちらが生薑(しょうが)、こちらが茗荷だと教えられた。灯台下暗し。しかし、どちらも似たようなものだった。以下、いつものように私の地名カードにある「茗荷」地名を紹介する。

茗荷谷 (大崎町野方)

蕨荷谷 (牧園町三体堂・田代町麓)

明ヶ谷 (鹿児島市小野・鹿児島市西別府・穎娃町郡・

笠沙町片浦・笠沙町赤生木・川辺町宮・金峰町大野・

吹上町和田・松元町春山)

茗ヶ谷 (有明町伊崎田・大隅町須田木・大隅町大谷)、

明賀谷 (川辺町高田)

若荷谷 (牧園町万膳)

茗荷迫 (佐多町馬籠・輝北町下百引)

蕨荷迫 (下甌村手打)

明ヶ迫 (吉田町西佐多浦・串良町細山田・伊集院町麦

生田)

名ヶ迫 (西之表市西之表・根占町川北)

妙ヶ迫 (中種子町野間)

以下は少数例。茗荷段 (輝北町諏訪原)、妙賀ノ段

(出水市上大川内)、名ヶ窪 (鹿児島市下田・鹿児島市

下伊敷)、明ヶ口 (枕崎市東鹿籠)、明ヶ岡 (菱刈町下手)、

妙甘ヶ宇都 (樋脇町塔之原)

総括すると谷・迫・窪など湿気の多い所に育つ植物と理解できる。また明ヶ・名ヶなどの当て字が多い。本来の名称を意識した蕨荷(蕨荷)・茗荷などは牧園・佐多・田代・大崎・輝北・下甌などの実直な田舎に見られる。社会的に開けて来ると世間ずれし横着になって本来の意味とはかけ離れた文字を意識的に用いているとも云える。簡略化とは果たしてよいことなのだろうか。次のようなことも起きている。小字など振り向かなくなった現在、役場の職員は字絵図や土地台帳に残っている地名を読みなくなり明ヶ谷(あけがたに)とルビを振っている。ながらくのご愛読、冥加に余るものを感じます。

(終)

〈鹿児島地名研究会世話役〉